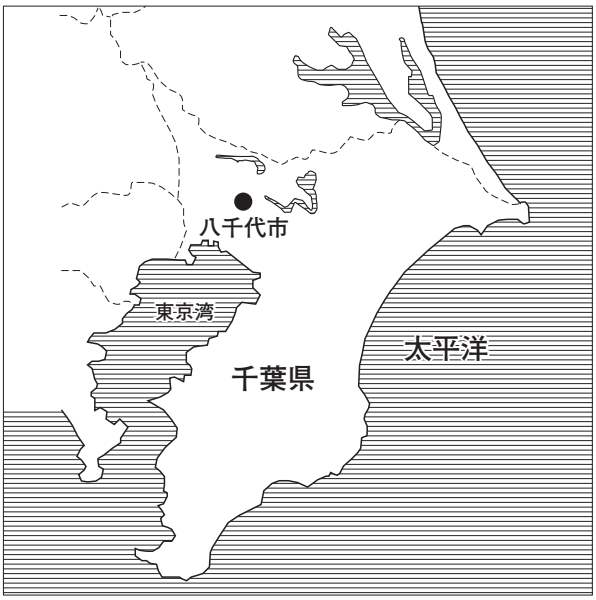
千葉県八千代市

上ノ山遺跡

（うえのやま）

－埋蔵文化財発掘調査報告書－



平成19年度

三奈建興　株式会社
八千代市遺跡調査会

例　　言

1　本書は，三奈建興株式会社による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県八千代市萱田町字上ノ山927-2ほかに所在する上ノ山遺跡(遺跡番号八千代市243)のａ地点である。

3　発掘調査から報告書作成にいたる業務は三奈建興㈱の委託を受け，八千代市遺跡調査会が実施した。

4　発掘調査及び整理作業は，下記の期間に実施した。

確認調査　昭和61年12月4日～同年12月13日

本調査　　昭和62年3月6日～同年3月20日

整理作業　平成19年7月1日～平成20年3月31日

5　整理作業は，実測・トレース等を秋山利光・植田正子・立松紀代美，遺物の写真撮影を高屋麻里子が行った。また，本書の執筆・編集は秋山が行った。

地形図及び遺構の挿図は原図を縮小した図面をスキャナで取り込み，コンピューター上で描画ソフトにより作図したものを用いている。また，遺物の写真は整理時にポジフィルム及びデジタルの両方で撮影しているが，本書の図版はデジタルデータを用いて作成している。

6　本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面，写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第1図　国土地理院発行　1/50,000「佐倉」（平成10年発行）

第2図　大日本帝国陸地測量部発行　1/20,000「下志津原」（明治36年測図・明治43年発行）

第3図　八千代市発行　1/2,500八千代都市計画基本図№19・№24（平成13年修正）

第18図　八千代市発行　1/2,500八千代都市計画基本図№19・№24（昭和60年修正）

をそれぞれ，加筆・修正あるいは縮小して使用している。

8　本書の遺構実測図における用例は，以下のとおりである。

⑴図面の方位は，すべて磁北である。

⑵遺構図面の縮尺は基本的に竪穴住居跡を1/80，炉を1/40とした。

⑶遺構図中の一点鎖線は人為的な硬化範囲，破線は推定復元線を示す。記号等は図中に凡例を示した。

⑷各遺構図の水準は，第4図の元となった測量図の原点，市道境の石杭（KBM＝±0m）を基準とした。

9　本書の遺物実測図における用例は，以下のとおりである。

⑴図面の縮尺は基本的に以下のとおりとした。しかし，編集の都合上適時変更し図中に記載した。

土器実測図　1/4　　土器拓影図・土製品実測図　1/3　　石器・石製品実測図1/1～1/4

鉄器・鉄製品実測図　1/1～1/4

⑵ 本書では実測図の左又は下に遺物の説明を付した。図版No.の後の（　）には検索のための整理ナンバーを記した。また，測定値の（　）は復元推定値を表し，〈　〉は現存値を表している。

10　発掘調査から本書の刊行に至るまで，以下の諸機関・諸氏にご指導，ご協力いただきました。記して感謝の意を表します。（敬称略）

千葉県教育庁文化財課，株式会社奥村組，スガ企画株式会社，コクサイ航測株式会社

目　　次

目　次　本文目次・挿図目次・図版目次
第Ⅰ章　遺跡と調査の概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　遺跡の立地と概要…… 1
　第３節　周辺の遺跡…… 4
　第４節　確認調査の概要…… 6
　第５節　本調査の概要…… 7
第Ⅱ章　遺構と遺物……10
　第１節　遺構（1号住居跡・2号住居跡）……10
　第２節　グリッド出土遺物……17
第Ⅲ章　まとめ……18
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　上ノ山遺跡と周辺遺跡……2
第2図　上ノ山遺跡の周辺地形 …… 3
第3図　上ノ山遺跡の調査地点……4
第4図　確認調査トレンチ配置 …… 5
第5図　調査区の土層……7
第6図　ａ地点本調査区域及びｂ・ｃ地点 …… 8
第7図　本調査区域遺構検出状況…… 10
第8図　1号住居跡……11
第9図　1号住居跡遺物出土状況 …… 12
第10図　1号住居跡出土遺物……12
第11図　2号住居跡 …… 13
第12図　2号住居跡遺物出土状況……14
第13図　2号住居跡出土遺物(1) …… 15
第14図　2号住居跡出土遺物(2)……16
第15図　グリッド遺物出土状況…… 17
第16図　グリッド出土遺物 ……17
第17図　上ノ山遺跡検出住居跡と主な出土遺物 19
第18図　上ノ山遺跡と川崎山遺跡の弥生時代
　　後期の住居跡検出状況…… 20

図版目次

図版1　確認調査状況・調査風景・遺構検出状況
図版2　1号住居跡・1号住居跡出土遺物
図版3　2号住居跡・2号住居跡出土遺物(1)
図版4　2号住居跡出土遺物(2)・グリッド出土遺物

第Ⅰ章　遺跡と調査の概要

第１節　調査に至る経緯

昭和61年8月12日付けで，開発の事業主体である三奈建興　株式会社から八千代市萱田町字上ノ山927-2他の6,577.90㎡について，分譲住宅を建設するための宅地造成を目的とした「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。この照会を受けた八千代市教育委員会は現地踏査を行ったところ，現況が山林及び荒地であり，わずかであるが土器の散布を確認した。また，照会地が周知の遺跡の範囲内でもあり，遺構の検出される可能性が高いと考えられ，市教委は千葉県教育委員会にその旨の意見を付して報告した。遺跡の状況を把握するため，同年9月17日試掘調査を実施した。台地上の平坦面に対して試掘トレンチ3本，試掘坑4ヶ所，計61㎡を掘削し，各トレンチから土器少量と試掘坑から遺構1ヶ所の検出をみた。それらの資料にもとづき，同年10月2日付けで傾斜地を除く3,700㎡について，県教委から埋蔵文化財が所在するとの回答があり，照会者に通知した。

昭和61年10月1日付けで事業者から，文化財保護法第57条の２第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出された。事業者との協議により，当該地を発掘調査による記録保存とすることで合意し，事業者から委託を受けた八千代市遺跡調査会が，同年10月31日文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を市教委に提出し，準備の整った同年12月4日確認調査を開始した。

この造成工事により隣接地と高低差が生じるため，572.4㎡の範囲で法面工事が必要となり，昭和61年12月11日に追加の照会が提出された。翌昭和62年1月29日付けで斜面を除く500㎡について，埋蔵文化財が所在する旨県教委より回答があった。土木工事の発掘届（法第57条の２第1項）が昭和62年3月9日に事業者から追加提出され，すでに，当初の区域で本調査が予定されていたため，あわせて確認調査を実施することとなった。

第２節　遺跡の立地と概要

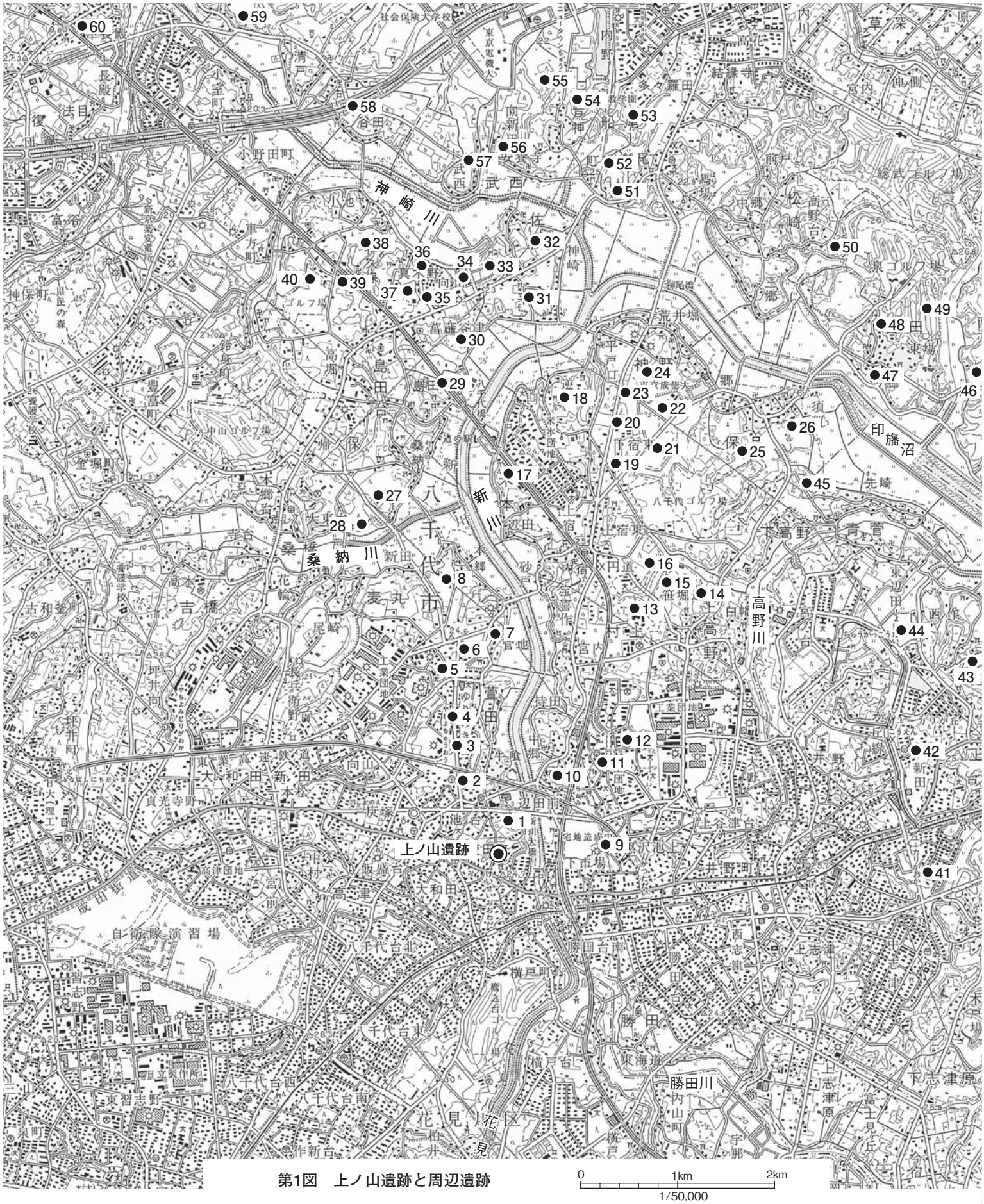
八千代市は千葉県北西部に位置する。千葉市の中心部まで約13キロメートル，都心までは約30キロメートルの距離にあり，昭和42年の市制施行以来，首都圏のベッドタウンとして発展してきた。

上ノ山遺跡は八千代市南部，新川の西岸の萱田町に所在する。

新川は長沼一帯を源に持ち，印旛沼水系に属する。流れは北あるいは北西に流下し，宇那谷・勝田を経て大和田付近で勝田川から新川と名前を変える。現在，大和田付近で江戸時代から開削が行われてきた堀割りが分水界を越えて，東京湾に流れ込む花見川につながっているが，新川は本来さらに北に流れ，桑納（かんのう）川（がわ）と合流し平戸付近で流れが東に変わり神崎川（かんざきがわ）と共に印旛沼に流れ込んでいる。

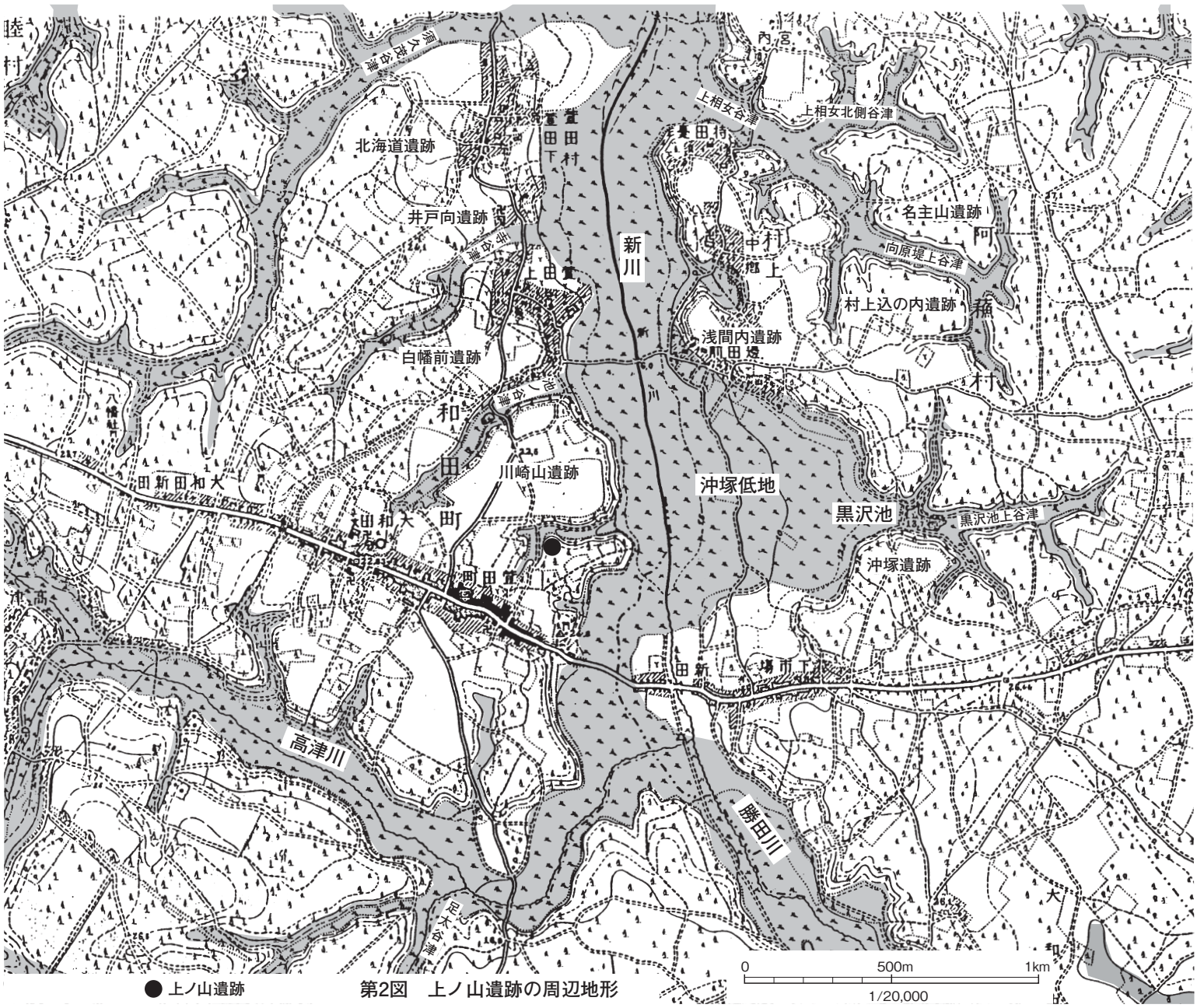
本跡は成田街道（現国道296号線）北側の新川に向かって細長く突き出た舌状台地上の中程のところに立地している。この舌状台地は新川中流域に所在する沖塚低地（第2図）に向かってのびており，台地の中ほどでわずかに北方に突出している。この突出部の標高22m～24mの下総下位面に調査区は立地する。本跡の北及び西側は新川に向かって開析された小谷津に面している。また，新川を望むこの台地の先端には上ノ山古墳群が所在している。（第3図）

本跡はこの調査地点以降，平成6年にｂ地点，平成9年にｃ地点の調査が行われている。（注1）



第1図　上ノ山遺跡と周辺遺跡

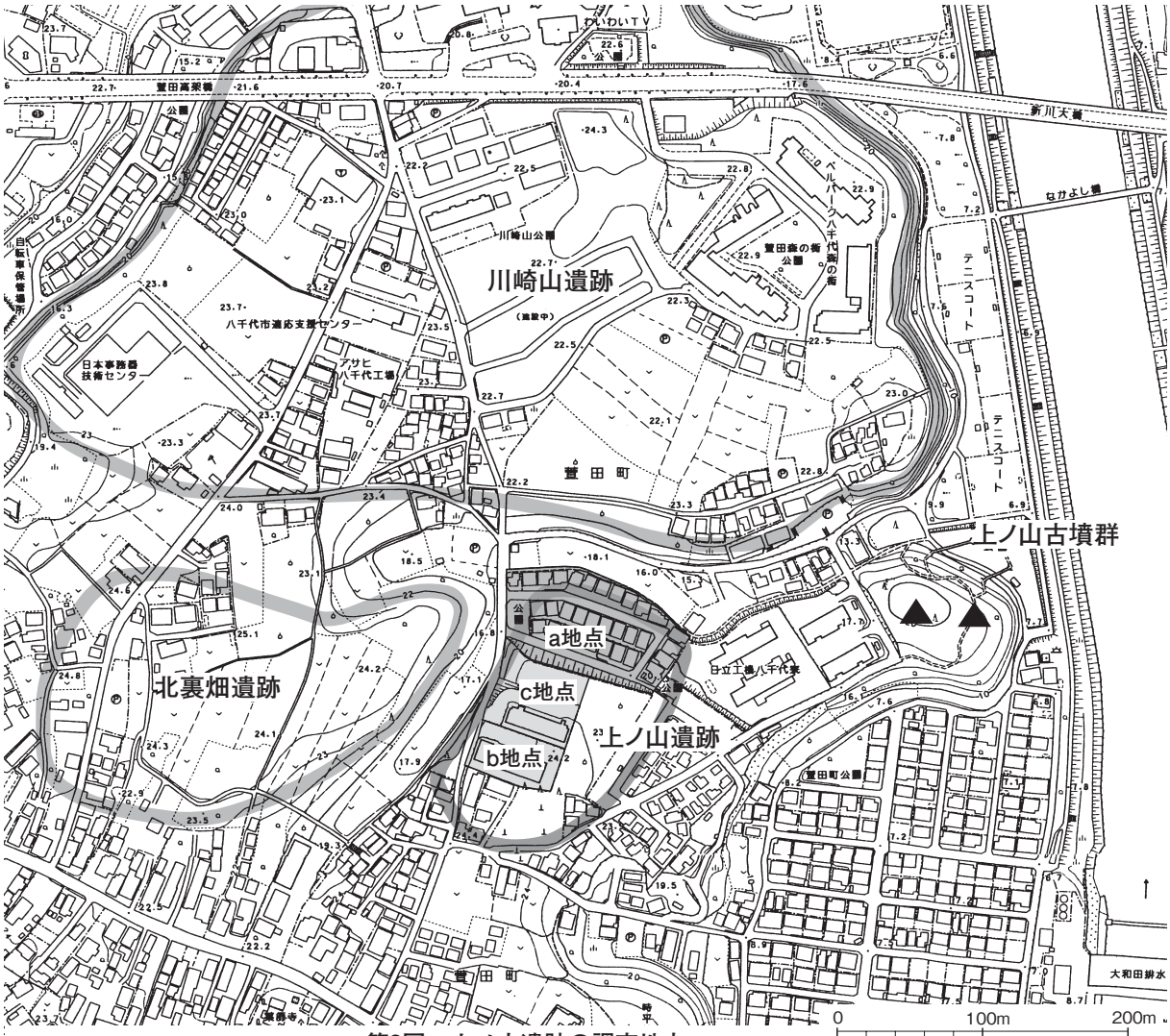
1. 川崎山遺跡　2. 白幡前遺跡　3. 井戸向遺跡　4. 北海道遺跡　5. ヲサル山遺跡　6. 権現後遺跡　7. 菅地ノ台遺跡　8. 麦丸遺跡　9. 沖塚遺跡　10. 浅間内遺跡
11. 村上込の内遺跡　12. 名主山遺跡　13. 村上新山遺跡　14. 堂の上遺跡　15. 平沢遺跡　16. 阿蘇中東側遺跡　17. 青柳台遺跡　18. 逆水遺跡　19. 雷遺跡　20. 役山東遺跡
21. 上谷遺跡　22. 栗谷遺跡　23. 向境遺跡　24. 境堀遺跡　25. 郷遺跡　26. おおびた遺跡　27. 桑納遺跡　28. 桑橋新田遺跡　29. 島田込の内遺跡　30. 間見穴遺跡
31. 道地遺跡　32. 子の神台遺跡　33. 田原窪遺跡　34. 佐山台遺跡　35. 東山久保遺跡　36. 瓜ヶ作遺跡　37. 松原遺跡　38. 妙正神遺跡　39. 神久保寺台遺跡　40. 原内遺跡
41. 上座矢橋遺跡　42. 萱橋遺跡　43. 小竹大原遺跡　44. 西ノ台遺跡　45. 先崎西原遺跡　46. 岩戸広台遺跡　47. 馬々台遺跡　48. 仲内遺跡　49. トヶ前遺跡
50. 松崎Ⅰ遺跡　51. 向ノ地遺跡　52. 船尾町田遺跡　53. 船尾白幡遺跡　54.　鳴神山遺跡　55. 白井谷奥遺跡　56. 向新田遺跡　57. 北の台遺跡　58. 谷田木曽地遺跡
59. 神々廻宮前遺跡　60. 復山谷遺跡



● 上ノ山遺跡　　第2図　上ノ山遺跡の周辺地形

第1表 上ノ山遺跡周辺の弥生時代遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡No.	弥生時代		弥生時代末～古墳時代初頭	調査年	周辺遺跡の参考文献等
				中期	後期			
1	川崎山遺跡	八千代市萱田町字川崎山	241		○	○	S54～H19	6，7，8，9（萱田町川崎山遺跡）
2	白幡前遺跡	八千代市萱田字白幡前	185		○		S56～S60	10
3	井戸向遺跡	八千代市萱田字寺の台	284		○	○	S55～S56	11，15
4	北海道遺跡	八千代市萱田字北海道	183		○		S54～S55	12，15
5	ヲサル山遺跡	八千代市大和田新田字ヲサル山	283		○	○	S56～S57	13
6	権現後遺跡	八千代市大和田新田字権現後	171		○	○	S52～S57	14，15
7	菅地ノ台遺跡	八千代市萱田字菅地の台	179		○		S63	16
9	沖塚遺跡	八千代市村上字黒沢池上	215	○			H2，H4，H5	1，2
10	浅間内遺跡	八千代市村上字浅間内	204		○	○	H6～H16	2，18，19
11	村上込の内遺跡	八千代市村上字込の内	210		○		S48	17
12	名主山遺跡	八千代市村上字向原	205		○		S46	20
13	村上新山遺跡	八千代市村上字新山	193		○		S53	39
14	堂の上遺跡	八千代市上高野字堂の上	219		○		H14～H16	21，22，23
15	平沢遺跡	八千代市上高野字平沢	217		○		H7	24
16	阿蘇中学校東側遺跡	八千代市米本字山谷	119		○		S55～S57	25，26
17	青柳台遺跡	八千代市米本字青柳台	111		○		S60	27
18	逆水遺跡	八千代市米本字逆水	100	○	○		H8～H17	3，36，37，38
21	上谷遺跡	八千代市保品字上谷	77	○	○		H4～H10	29
22	栗谷遺跡	八千代市保品字中台谷	75	○	○		S63～H6	30
33	田原窪遺跡	八千代市佐山字田原窪	269	○	○		H3～H4	4，5



第3図　上ノ山遺跡の調査地点

第３節　周辺の遺跡

本跡で検出された遺構・遺物が弥生時代後期の時期であるため，本節では弥生時代における周辺の遺跡について概観する。

本跡の新川対岸に立地する**沖塚遺跡**(9)では，遺構に伴わずに出土した弥生時代中期前半と位置付けられる1個体分の土器が報告されている。

市内では中期後半の遺跡として3遺跡が確認されている。方形周溝墓群の検出された**逆水遺跡**(18)・**栗谷遺跡**(22)がある。栗谷遺跡では同時に中期後半の竪穴住居跡も5軒検出されている。また，**田原窪遺跡**(33)では環濠集落が検出され，約40軒の竪穴住居跡が3期ないしは4期にわたり営まれていた。

後期になると，本跡の北側に隣接する台地に**川崎山遺跡**(1)が所在する。この川崎山遺跡は広域な台地全体に広く展開している。これまでに数度にわたり調査が行われ，概ね4ブロック26軒の竪穴住居跡が検出されている。さらに北側には萱田遺跡群が広範囲に所在している。**白幡前遺跡**(2)・**井戸向遺跡**(3)・**北海道遺跡**(4)・**ヲサル山遺跡**(5)・**権現後遺跡**(6)の5遺跡から後期の集落が検出されている。白幡前遺跡では3ブロック17軒の竪穴住居跡が検出され，北海道遺跡では1軒，井戸向遺跡2ブロック6軒の竪穴住居跡がみられる。隣接する北海道遺跡・ヲサル山遺跡では5ブロック107軒の竪穴住居跡が検出されている。方形

周溝墓も6基検出された。権現後遺跡の北東側に所在する**菅地ノ台遺跡**(7)の調査でも竪穴住居跡が1軒検出されているが，権現後遺跡の第1群に近接している。

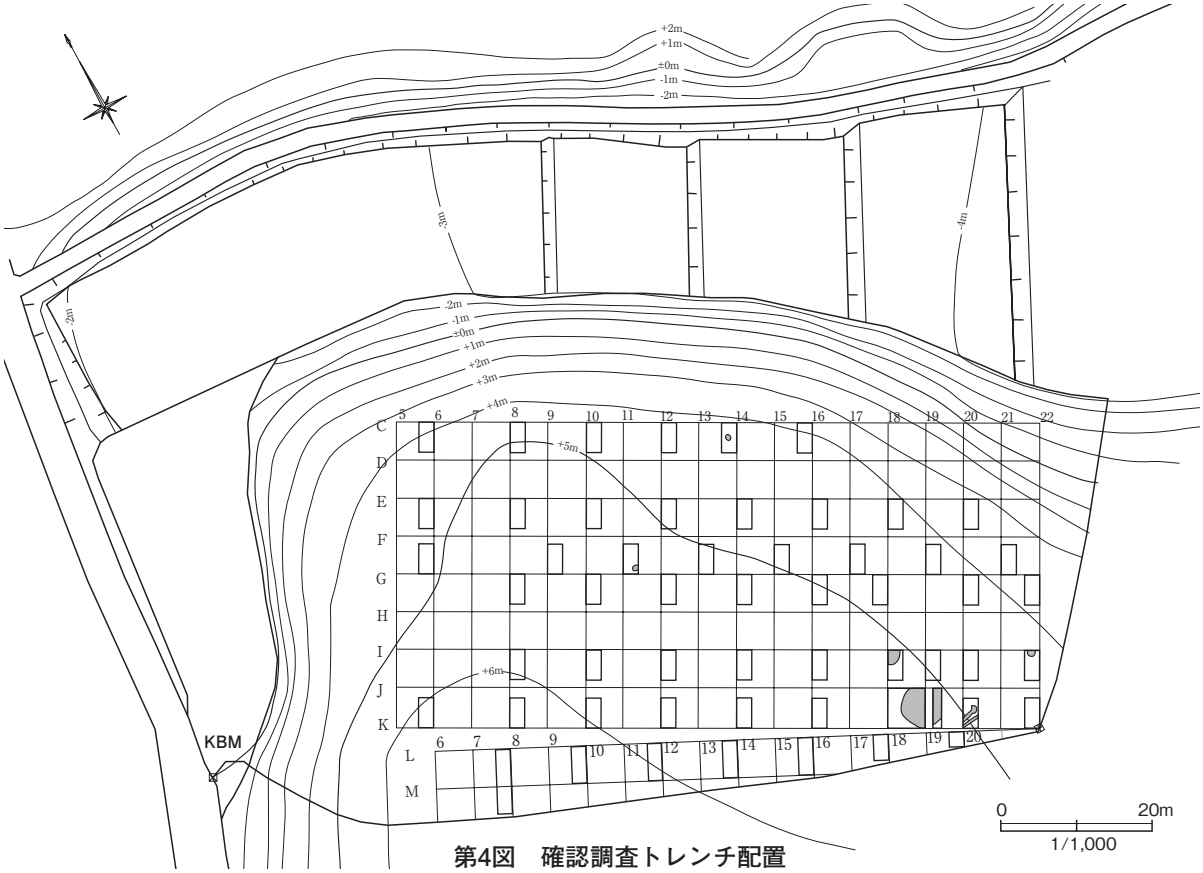
新川低地を挟んで東岸には**浅間内遺跡**(10)・**村上込の内遺跡**(11)・**名主山遺跡**(12)が所在している。浅間内遺跡は新川に面し，数ブロックに分かれて19軒の竪穴住居跡の検出が確認されている。新川から分かれた上相女谷津の奥まった台地上に村上込の内遺跡と名主山遺跡が両岸に向かい合って立地している。それぞれ,14軒と1軒の竪穴住居跡が検出されている。さらに新川に面する遺跡として，確認調査ではあるものの**青柳台遺跡**(17)が確認されている。

これらの遺跡が立地する台地とひとつづきの台地でもあり，地理的には隣接しているが，新川の東側に開析された高野川流域の奥まった台地上に**村上新山遺跡**(13)・**堂の上遺跡**(14)，**平沢遺跡**(15)，**阿蘇中東側遺跡**(16)が近接して所在している。

桑納川流域では北岸に**桑納遺跡**(27)と**桑橋新田遺跡**(28)が所在する。桑橋新田遺跡では方形周溝墓も3基確認されている。

新川が印旛沼に流れ込む周辺では北岸に**間見穴遺跡**(30)と**道地遺跡**(31)が所在している。また，印旛沼に面する神野・保品付近では**雷遺跡**(19)，**役山東遺跡**(20)，**上谷遺跡**(21)，**栗谷遺跡**(22)，**向境遺跡**(23)，**境堀遺跡**(24)，**郷遺跡**(25)，**おおびた遺跡**(26)，**先崎西原遺跡**(45)が所在している。

印旛沼に注ぐ神崎川流域の南岸では台地先端の**子の神台遺跡**(32)が所在している。舌状台地の中ほどには**佐山台遺跡**(34)，**東山久保遺跡**(35)，**瓜ヶ作遺跡**(36)，**松原遺跡**(37)，**妙正神遺跡**(38)などの集落が連続的に立地している。



第4図　確認調査トレンチ配置

第４節　確認調査の概要

調査の経過

当初の調査対象区域には隣接地と高低差のための法面が含まれていなかった。そのため，宅地造成部分に対する確認調査として開始された。この確認調査は調査の準備の整った昭和61年12月4日より実施され，同年12月13日に終了した。残った法面部分の区域の確定が遅れたため，この区域の確認調査は本調査時に併せて行った。昭和62年3月6日から3月12日まで実施された。

日記抄

昭和61年12月4日（木）　現地確認。杭打ち作業によりグリッド設定

12月5日（金）　器材搬入。周辺の現況写真の撮影，トレンチの掘削を開始する。

12月9日（火）　トレンチ掘削継続。Ⅰ18グリッドからも遺構確認。写真撮影する。

12月10日（水）　トレンチ掘削継続。各トレンチの精査。セクションの分層・写真撮影により記録する。

12月11日（木）　トレンチ精査。検出遺構を実測により記録する。

12月12日（金）　遺構の土層を実測により記録する。

12月13日（土）　調査区域全体の写真撮影。器材を搬出して調査を完了する。

法面部分の確認調査

昭和62年3月6日（金）　本調査事業と併せて器材搬入。杭打ち。

3月7日（土）　Ｌラインに確認調査のためのトレンチを設定。

3月9日（月）　確認トレンチ掘削開始。

3月10日（火）　確認トレンチ掘削継続。

3月12日（木）　トレンチを精査し，遺構が検出されていないことを確認して調査完了とする。

調査の方法

調査区域内の位置を特定するため，調査区全体に対し5m方眼のグリッドを組むこととした。このグリッドは，当初，現地で開発区域の正確な境界を確定できなかったため，開発区域南東隅の境界杭を基準点とし，境界に沿った開発区域内側の任意の方向に基準線を設定した。

杭の名称は南北方向にアルファベットを用い，東西方向にはアラビア数字により表示した。グリッド名称はグリッド北西隅の杭名称をもって表示した。

追加された法面部分の区域は，当初のグリッドラインを復元することができなかったため，設定された開発区域の境界線を再度基準線にして，グリッドを新たに設けた。杭名称は最終ラインがＫラインであったため，Ｌラインからとした。東西方向は当初の表示に合わせてアラビア数字で表示した。

標高については，測定された地点がなかったので，開発事業のために作られた地形測量図（第4図）に用いられた仮ＢＭ（ベンチマーク，ＫＢＭ）を±0mとして測定することとした。

調査面積は全体の状況を把握するため，調査区域全体の面積の10％を目標に，2m×4mの短いトレンチを規則的に配置することを当初の基本とした。

当初の区域の確認調査でのトレンチは拡張したものを含めて，49ヶ所を調査した。掘削面積は406㎡となり，調査対象面積に対して10.9％を調査した。また，追加区域では7ヶ所のトレンチを掘削し60㎡の掘削面積となった。これは調査対象面積に対して12.0％にあたった。

遺構確認面と土層

遺構の確認面はソフトロームが調査区域全体に明瞭に検出されていることにより，ソフトローム上面をもって検出することとした。

土層は調査区に高低差があることを配慮し，南北・東西方向の2方向とした。南北方向はＨの杭ライン，東西方向は12の杭ラインの土層を観察し，実測図をもって記録した。

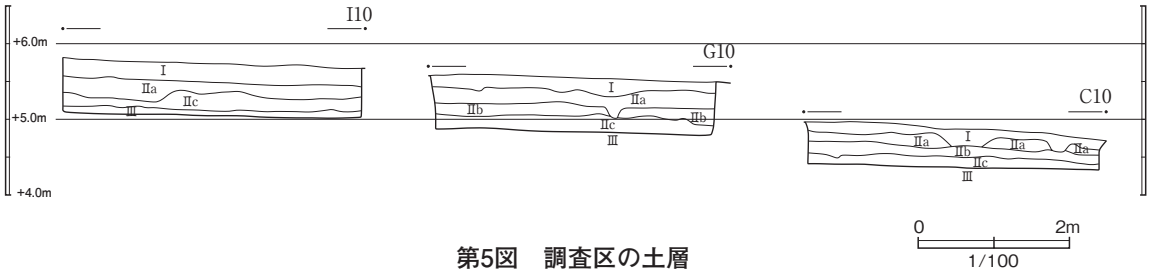
第Ⅰ層は暗褐色土を主体とする表土層である。

第Ⅱa層は暗褐色土層で黒褐色土をわずかに含み，焼土粒子・炭粒子を全体的に多く混入。しまり良い。

第Ⅱb層は黒褐色土層で，暗褐色土を斑状に含み，わずかに焼土粒子が混入している。

第Ⅱc層は褐色土層でソフトロームの漸移層である。

第Ⅲ層はソフトローム層である。



第5図　調査区の土層

確認調査の成果

確認調査の成果は弥生時代の竪穴住居跡が2軒のほか，土坑3基，溝状遺構2条を検出している。

出土遺物は弥生土器を中心に出土している。時期としては，後期が想定された。また，それ以外の遺物はほとんどみられず，縄文土器は確認できなかった。

第５節　本調査の概要

調査区域

確認調査により得られた結果から判断して，本調査の対象は南東隅の区域から検出された2軒の竪穴住居跡と散在する3基の土坑及び2条の溝状遺構であった。協議の結果，遺構の所在した区域の約170㎡について発掘調査による記録保存をすることとなった。また，追加区域については，本調査と平行して行われた確認調査の結果，本調査の対象とするべき遺構が検出されなかった。

調査の方法

竪穴住居跡の調査のための表土剥ぎは重機をもって行った。

竪穴住居跡が想定された遺構については，ナンバーと住居跡名を用いて表記することとした。調査は十字に土層観察用のベルトを残し，サブトレンチ掘削後に全体を掘削した。遺物はできる限り出土した地点に残し，位置と深さを測定した上で取り上げることとした。微細な遺物については位置等を測定せず一括で取り上げている。遺構・遺物の測定のための方眼は，法面工事のための追加区域で行われた確認調査の基準線と兼用して設定した。現場に1m方眼を組み，平面位置の測定を行った。

水準の測定については確認調査と同様にＫＢＭを±0mとして測定した。

調査の経過

本調査は，法面工事のための区域を確定する関係から，準備の整った昭和62年3月6日に開始した。竪穴住居跡の検出された区域の表土剥ぎから開始し，竪穴住居跡の調査及び土坑の調査を行った。同年3月20日すべての調査を完了し，現地を撤収した。

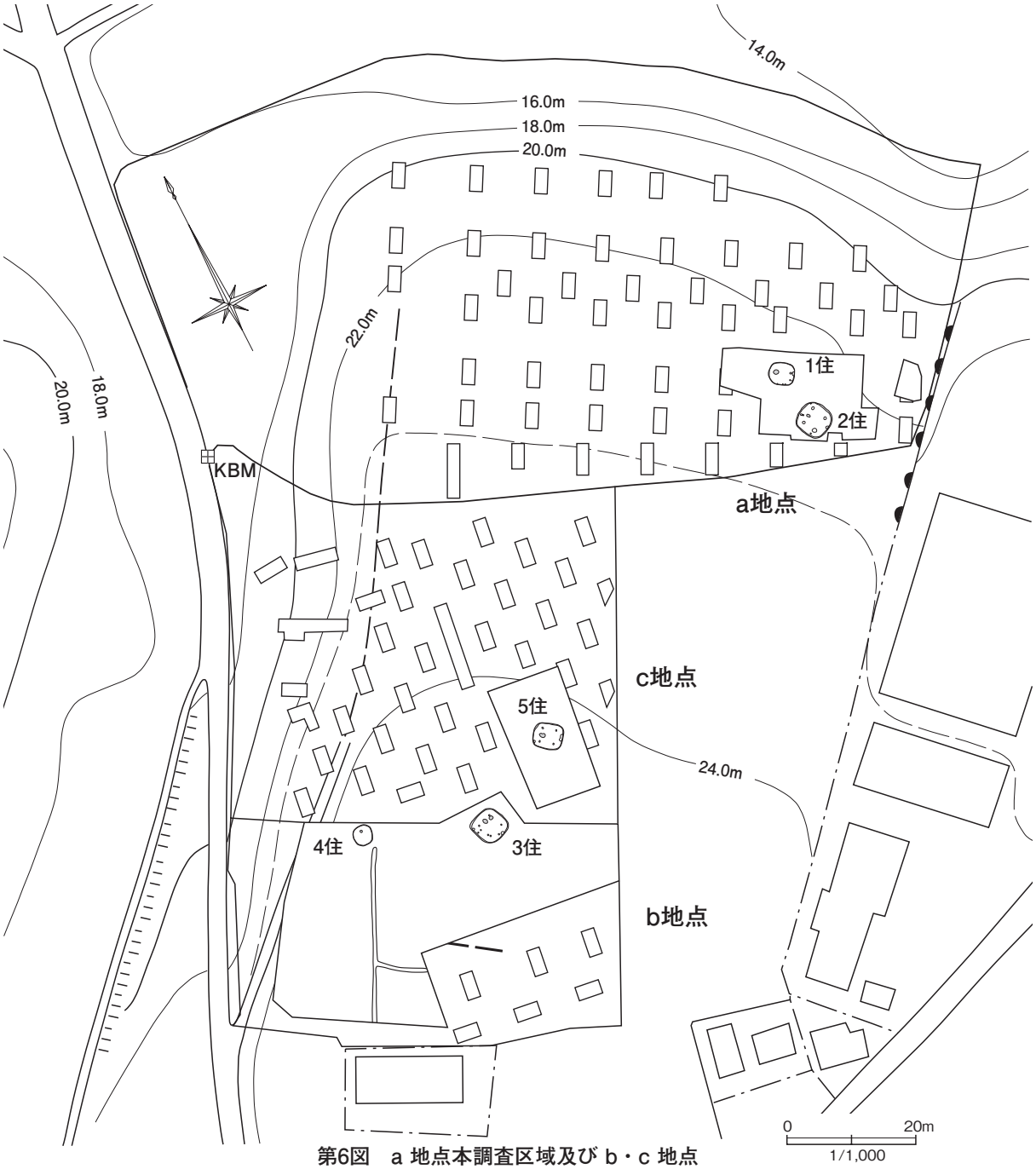
日記抄

昭和62年3月6日（金）　重機による掘削開始。杭打ち。

3月7日（土）　杭打ち。

3月9日（月）　住居跡の精査，1m方眼の設定。

3月10日（火）　1号・2号住居跡のトレンチ掘削開始。仮ＢＭから水準の移動。



第6図　a 地点本調査区域及び b・c 地点

3月12日（木）　1号・2号住居跡のトレンチの拡張掘削。

3月13日（金）　1号住居跡の掘削終了，写真撮影。2号住居跡のトレンチ拡張掘削継続。午後雨中止

3月14日（土）　1号住居跡遺物取り上げ。2号住居跡遺物出土状況写真撮影，同取り上げ。調査区の位置確定のための平板実測。

3月16日（月）　1号住居跡遺物取り上げ，焼土実測。

3月17日（火）　1号住居跡土層観察ベルト撤去。2号住居跡遺物取り上げ。

3月18日（水）　1号住居跡平面実測及びエレベーション実測。2号住居跡セクション実測。

3月19日（木）　2号住居跡土層観察ベルト撤去。全掘写真撮影，同平面実測。

3月20日（金）　2号住居跡平面実測，同エレベーション実測，同炉調査。調査を完了し，器材撤収。

（注1）この調査の報告は平成12年３月『上ノ山遺跡b･c地点発掘調査報告書』として八千代市上ノ山遺跡調査会及び八千代市遺跡調査会により刊行されている。

参考文献

1　深谷　昇　「八千代市最古の弥生土器」『埋やちよ　№7　―千葉県八千代市埋蔵文化財通信―』（八千代市教育委員会　2000.01.20発行）
2　八千代市遺跡調査会　2007　『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』
3　八千代市教育委員会　1997　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成8年度』
4　八千代市教育委員会　1995　『平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
5　秋山利光　「田原窪遺跡」　2003　『千葉県の歴史　資料編　考古2（弥生・古墳時代）』（財）千葉県史料研究財団
6　八千代市遺跡調査会　1980　『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告 』
7　八千代市遺跡調査会　1999　『千葉県八千代市川崎山遺跡　―埋蔵文化財発掘調査報告書―』
8　八千代市遺跡調査会　2003　『千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点』
9　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市川崎山遺跡ｈ地点発掘調査報告書』
10（財）千葉県文化財センター　1991　『八千代市白幡前遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―』
11（財）千葉県文化財センター　1987　『八千代市井戸向遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―』
12（財）千葉県文化財センター　1985　『八千代市北海道遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』
13（財）千葉県文化財センター　1986　『八千代市ヲサル山遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―』
14（財）千葉県文化財センター　1984　『八千代市権現後遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』
15（財）千葉県文化財センター　1993　『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡』
16　八千代市教育委員会　1989　『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　昭和63年度』
17（財）千葉県都市公社　1975　『八千代市村上遺跡群』
18　八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』
19　八千代市教育委員会　2007　『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書』　第2次本調査・第3次本調査
20　八千代市教育委員会　1972　『名主山遺跡』
21（財）千葉県文化財センター　2002　『千葉県文化財センター年報　№26　―平成12年度―』
22（財）千葉県文化財センター　2003　『千葉県文化財センター年報　№27　―平成13年度―』
23（財）千葉県文化財センター　2004　『千葉県文化財センター年報　№28　―平成14年度―』
24　八千代市教育委員会　1997　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成7年度版―』
25　八千代市遺跡調査会　1980　『阿蘇中学校東側遺跡』
26　八千代市遺跡調査会　1984　『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』
27　八千代市教育委員会　1987　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書集』
28　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡』第3分冊
29　八千代市遺跡調査会　2001～2005　『千葉県八千代市上谷遺跡』第1分冊～第5分冊，第1分冊本文編
30　八千代市遺跡調査会　2001～2003　『千葉県八千代市栗谷遺跡』第1分冊～第2分冊，第1分冊本文編
31　八千代市遺跡調査会　2004　『千葉県八千代市向境遺跡』
32　八千代市遺跡調査会　2005　『千葉県八千代市境堀遺跡』
33　八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』
34　おおびた遺跡調査団　1975　『おおびた遺跡　―八千代市少年自然の家建設地内遺跡―』
35　八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成6年度版―』
36　八千代市教育委員会　1996　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成7年度』
37　八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』
38　八千代市教育委員会　2004　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』
39　村上新山遺跡発掘調査団　1978　『千葉県八千代市　村上新山遺跡発掘調査報告書』

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　遺構

調査の結果，竪穴住居跡2軒を検出した。確認調査では土坑及び溝状遺構の検出が想定されていたが，本調査時のサブトレンチ等の掘削によりそれぞれ遺構とは判断されなかった。その結果，最終的に竪穴住居跡のみの検出となった。住居跡は標高22m～23mの台地上平坦面に立地し，調査区域東側の約15mの範囲内に近接して検出されている。

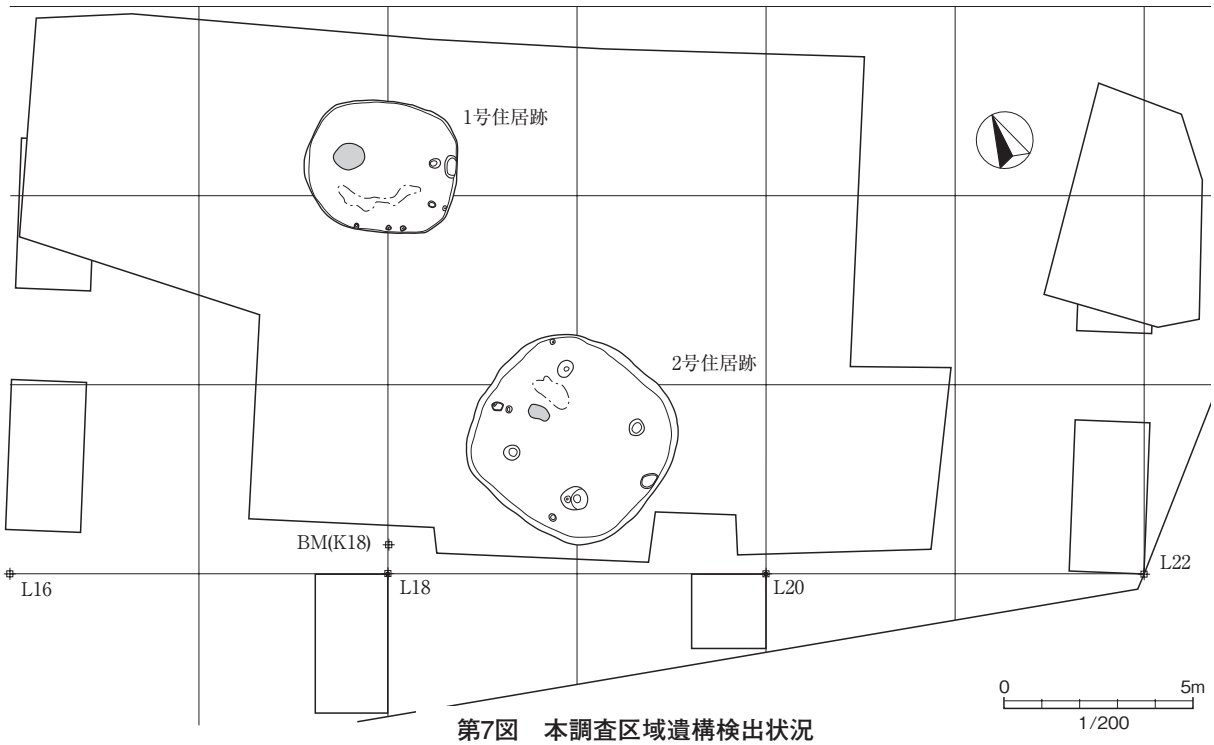
1号住居跡（第8図～第10図・図版2）

検出された**位置**は，確認調査のグリッドでI18グリッドに位置している。

住居跡の**形状**を楕円形としているが，長方形の意識が強い。住居跡の**覆土**は耕作による撹乱を多く，深く受けているものの，住居跡の廃棄後に緩やかに自然埋没したものと判断された。住居跡の**構造**は明確な主柱穴が検出されず，壁柱穴も小さくて浅いピットが4ヶ所しか確認されていない。**床面**はロームでほぼ平坦に整地されているが，炉の前面にあたる住居跡の中央部分でわずかに窪む傾向がみられる。また，住居跡の南西壁側で細長い**硬化面**が検出されている。**炉**は住居跡の北西寄りで検出された。炉と反対側の南東壁際に**出入口**に関連すると想定されるピットが検出されている。

第2表　上の山遺跡ａ地点　検出遺構一覧表　　〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値（　）推定復元計測値

名称	略称	種別	位　置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	炉	時代・時期	備考
				長軸・主軸	短軸	深さ					
１号住居跡	１D	竪穴住居跡	I 18	4.04	3.45	0.5	楕円形	N- 59°-E	炉	弥生時代・後期	
２号住居跡	２D	竪穴住居跡	J 19	5.13	5.04	0.78	楕円形	N- 24°-E	炉	弥生時代・後期	



第7図　本調査区域遺構検出状況

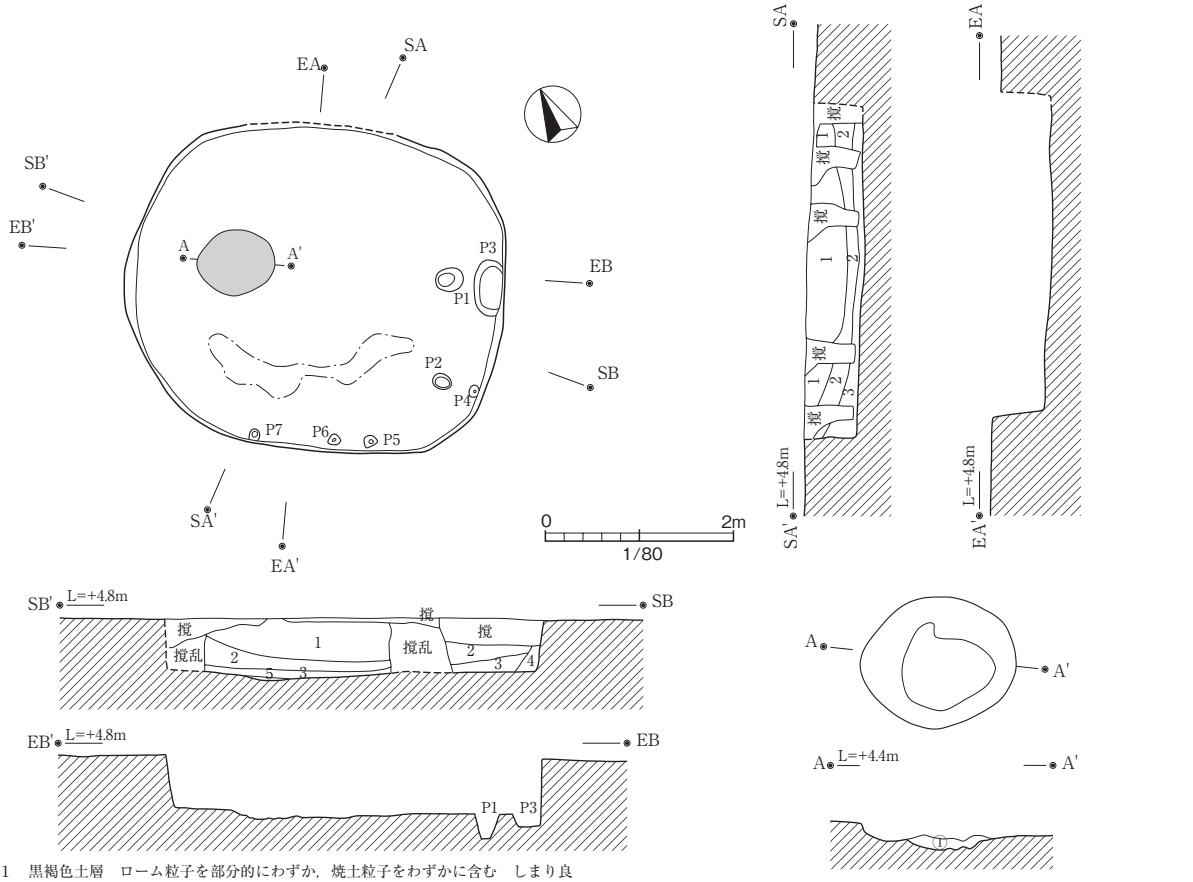
出土遺物は73点であった。内訳は弥生土器が68点，石が1点，鉄が1点，軽石が1点，粘土塊が1点，不明なもの1点である。遺物の**出土傾向**は，撹乱のため本来の埋没過程による時間差や位置を表してはいないものもあるが，多くの遺物が住居跡の中央にまとまり，床面より浮いた状態で出土していた。

弥生土器の内訳は無文が41点あり，内胴部片38点，底部片が3点(10図3･4･5)含まれる。底部片の10図3には底部穿孔がみられる。縄文の施文されている破片は，単節のものはみられず，小破片で明瞭でないものもあるが，附加条縄文が19点であった。その他，口縁部に刻み目があるものが1点，口縁又は胴部に縄文の圧痕が6点，結節の見られるものが3点。1の土器以外に輪積み痕のみられる破片は3点ある。

1は南西壁近くの床面上でほぼ完形で出土している。**2**は住居南西側の床硬化面付近から出土している。出土層位は床面直上から覆土上層までの広い範囲で検出されている。**3**は炉の近くの覆土下層から出土する。**6**は1の近くの床面直上から出土する。その他の遺物は覆土中・上層からの出土である。

第3表　1号住居跡

検出位置	I18	主軸×短軸×深さ（m）							
住居跡形状	楕円形	4.04	3.45	0.5					
長軸方位	N- 59°-E								
		縦×横×深（cm）					縦×横×深（cm）		
炉	位置　北西壁寄り	80	70	—	床硬化面	南西側一帯	220	30	—
P1	出入口ピットか	32	26	29	P5	壁柱穴	14	12	8
P2	—	22	18	4	P6	壁柱穴	14	12	6
P3	出入口関連ピットか	60	32	11	P7	壁柱穴	14	12	3
P4	壁柱穴	14	12	7					



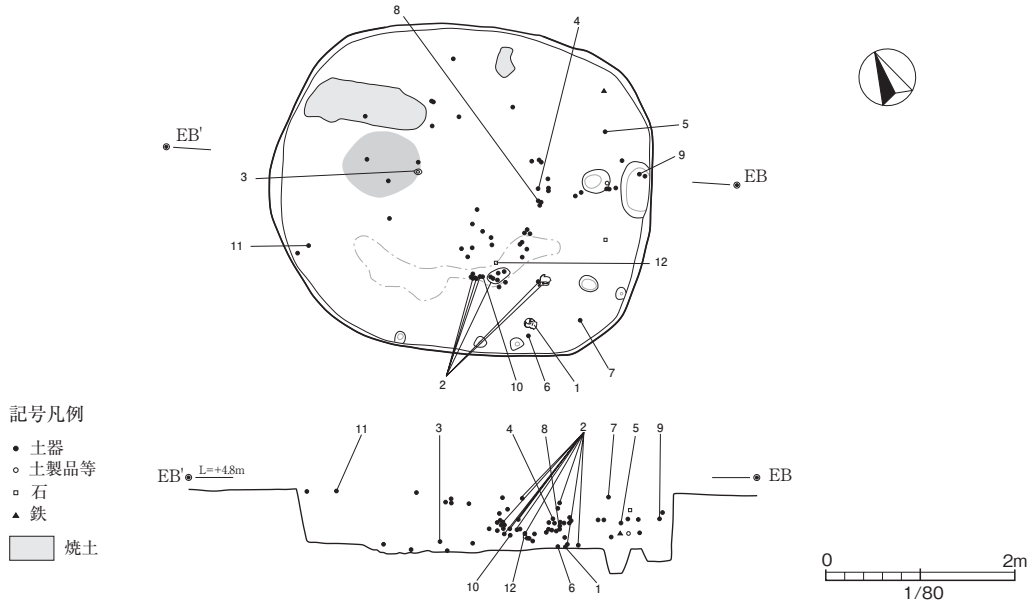
1　黒褐色土層　ローム粒子を部分的にわずか，焼土粒子をわずかに含む　しまり良
2　暗褐色土層　暗褐色土を斑状に混入　全体的に多くローム粒子を混入　しまり良
3　暗褐色土層　褐色土の混入が全体的にみられ，2層より明るい　北側はロームの混入が多く，北西壁下に焼土ブロックが混入　しまり良し
4　暗褐色土層　ローム粒子の混入が多く，2・3層より明るい　焼土粒子もまばらにみられる　しまり良いが，やや軟
5　暗褐色土層　炉跡部分の土層　焼土ブロックを混入　焼土粒子も多い　しまり良，やや硬質

炉実測図

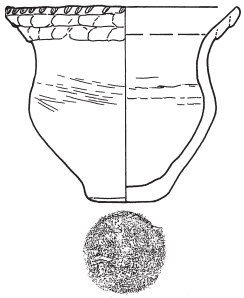
①　ハードロームの焼土化層

0　1m
1/40

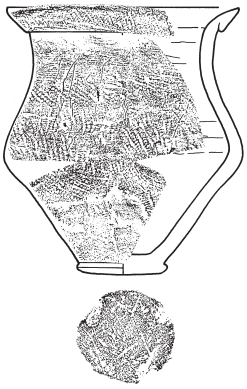
第8図　1号住居跡



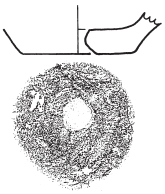
第9図　1号住居跡遺物出土状況



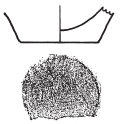
1. 弥生土器　甕（0101）
口径（12.6）　底径4.2　器高10.3
胴部最大径（10.0）
口縁に指頭による整形で，2段の輪積み痕を残す。胴部はヘラナデ
底部外面上半及び内面に煤が付着
焼成）やや不良，胎土）細砂粒
色調）外：橙5YR7/6　内：にぶい橙5YR7/4



2. 弥生土器　甕（0102）
口径（12.2）　底径4.8　器高14.1
胴部最大径12.6
口縁は折返しによる複合口縁，この口縁部に附加条（RL+L·L）　頸部には横位のナデにより無文帯を形成　頸部下から胴部下半まで附加条（RL+L·L）を雑に施文
底部は摩滅しているが，かすかに木葉痕が残る，煤が胴部上半に多く付着
焼成）良好，胎土）白色砂粒，石英細砂粒多い
色調）外：にぶい赤褐5YR4/3
内：橙5YR7/6

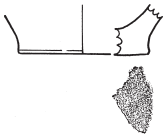


3. 弥生土器　甕　底部（0109）
口径—　底径6.0　器高—　最大径—
底部に焼成後上下両面から穿孔，孔径5mm
焼成）良好，胎土）小砂粒
色調）外：にぶい橙5YR6/3　内：褐灰5YR4/1

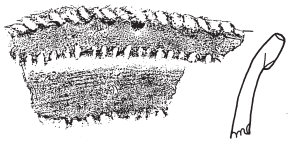


4. 弥生土器　甕　底部（0108）
口径—　底径（4.2）　器高—　最大径—
焼成）良好，胎土）白色等細砂粒
色調）外：灰黄2.5Y6/2　内：橙5YR6/6

0　10cm
1/4（1～5）

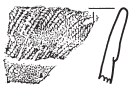


5. 弥生土器　甕　底部（0113）
口径—　底径（7.0）　器高—　最大径—
焼成）良好，胎土）細砂粒多い
色調）外：にぶい赤褐2.5YR5/4　内：—



6. 弥生土器　甕　口縁（0110）
口縁は折返しによる複合口縁，口縁は無文
口縁先端に原体の圧痕，下端に刻みを施す
頸部下に刻み，輪積み痕になるか
口縁外面に煤付着
焼成）良好，胎土）石英・白色小砂粒
色調）外：—　内：灰褐7.5YR4/2

7. 弥生土器　甕　口縁（0103）
口縁に輪積み痕が2段，口縁先端に原体の圧痕
外面には指頭の圧痕が残る
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）にぶい赤褐2.5YR5/3

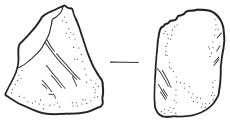


8. 弥生土器　甕　口縁（0105）
口縁は折返しによる複合口縁，
口縁に附加条LR+R·R，以下無文
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）褐灰7.5YR4/1

9. 弥生土器　甕　頸部（0111）
2段の輪積み痕，下段には原体の圧痕
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）にぶい黄褐10YR6/3

10. 弥生土器　甕　頸～胴部（0107）
頸部上位に無文，輪積み上に原体圧痕
上位にS字状結節文，下位にも結節か
焼成）良好，胎土）細砂粒　色調）黒7.5YR2/1

11. 弥生土器　甕　胴部（0104）
附加条
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調にぶい橙5YR6/4



12. 軽石　（0107）
両面に溝状の擦痕
長さ2.9cm　幅2.6cm　厚さ1.7cm
重量　3.2 g

第10図　1号住居跡遺物出土遺物

0　6cm
1/3（6～11）

0　5cm
1/2（12）

2号住居跡（第11図～第13図・図版3，4）

検出**位置**は確認調査のグリッドでＪ19グリッド，1号住居跡から南に約4mしか離れていない。

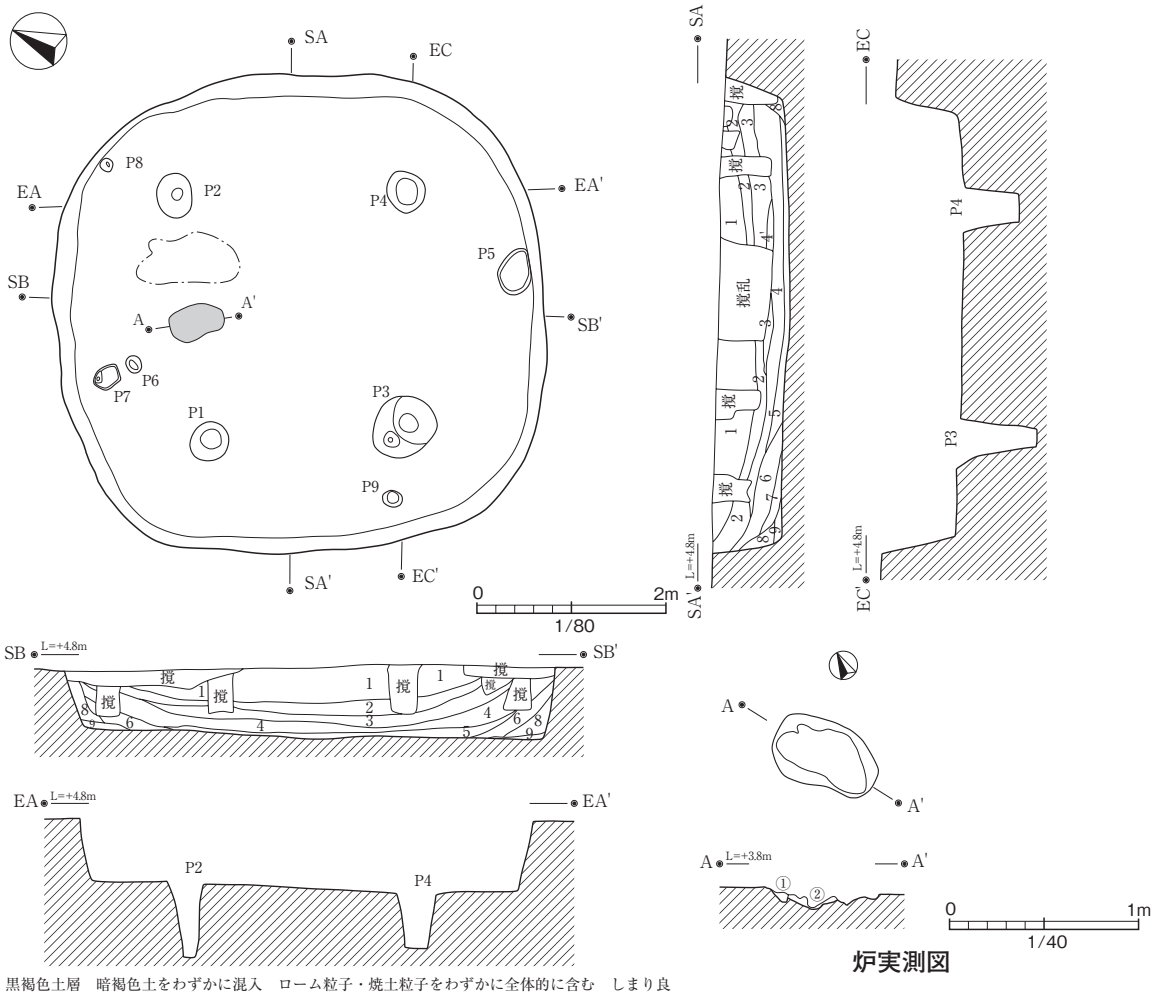
住居跡の**形状**は1号住居跡と同様に楕円形としたものの，やはり方形を相当意識しているようにみられ，胴張り隅円方形という方が正確だろうか。

住居跡の**覆土**は，1号住居跡と同様に耕作による深い撹乱を多く受けているものの，自然埋没したものと判断された。住居跡の**構造**は明瞭な主柱穴が4本検出され，住居跡の形状にあわせて方形に配置されて

第4表　2号住居跡

検出位置	Ｊ18・19	主軸×短軸×深さ（m）		
住居跡形状	楕円形	5.13	5.04	0.78
長軸方位	N- 24°-E			

		縦×横×深（cm）					縦×横×深（cm）		
炉	位置　北西壁寄り	58	34	—	床硬化面	炉の東側脇	110	50	—
P1	主柱穴	44	40	84	P6	—	20	17	7
P2	主柱穴	48	38	77	P7	—	30	24	9
P3	主柱穴	72	62	80	P8	壁柱穴	15	15	6
P4	主柱穴	46	41	59	P9	—	22	18	28
P5	出入口関連ピットか	52	37	3					

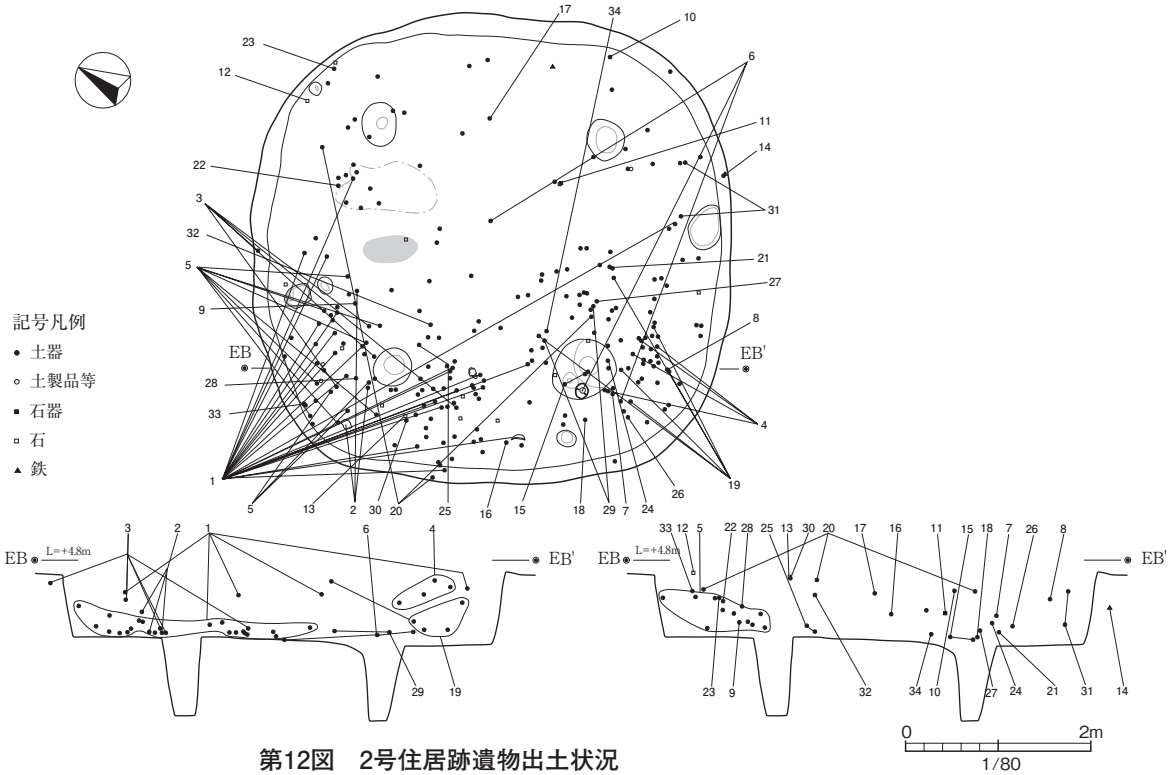


炉実測図

1　黒褐色土層　暗褐色土をわずかに混入　ローム粒子・焼土粒子をわずかに全体的に含む　しまり良
2　黒褐色土層　暗褐色土を斑状に混入し，ローム粒子の混入が全体的に多い　焼土粒子もわずか含み，しまり良
3　褐色土層　暗褐色土の混入多い　ローム粒子もまばら　焼土粒子わずか　しまり良
4　暗褐色土層　褐色土を全体的に混入　ローム粒子の混入が全体的に多　焼土粒子もまばら　しまり良，粘性有
5　褐色土層　暗褐色土を全体的に斑状に混入　ローム粒子・ブロックが多　焼土粒子わずか　しまり良，粘性有
6　暗褐色土層　褐色土を斑状に混入　ローム粒子の混入が非常に多い　焼土粒子もわずか　しまり良
7　暗褐色土層　褐色土が全体的に斑状に混入　ローム粒子の混入も多いが，6層より少　しまり良く，硬質。
8　暗褐色土層　褐色土の混入が全体的にあり，７層よりも明るい　ローム粒子の混入　しまり良，やや粘性有。
9　暗褐色土層　褐色土の混入は比較的少なく，７・８層より暗い　ローム粒子の混入が多　しまり良く，やや硬質
4'　暗褐色土層　3層に近い

①　根の撹乱
②　ハードロームの焼土化層

第11図　2号住居跡



第12図　2号住居跡遺物出土状況

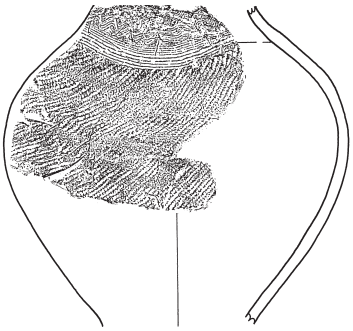
いる。炉は小さめであるが住居跡の北西側に偏り，炉の反対側の南東壁際には出入口に関連するとみられるピットが検出されている。**床面**はロームでほぼ平坦に整地されている。また，炉の東側のすぐ脇に狭い範囲であるが**床硬化面**が検出されている。

柱穴の土層は，P1とP3の覆土は暗褐色土が主体で，褐色土を多く混入していた。また，ローム粒子が多く含まれ，焼土・炭化粒子はわずかであった。土層は硬くしまった状態であった。P2もほとんど同様の土層であったが，黒褐色土が多く混入していた。しまりはあったが硬くはなかった。P4も同様に暗褐色土が主体であり，柱穴の中央部に黒褐色土が多く混入し，柱痕の可能性もあった。

出土遺物は259点であった。内訳は弥生土器が234点，石が15点，粘土塊4点，その他6点であった。石の中には石鏃1点，軽石2点を含んでいる。遺物の**出土傾向**は撹乱が深くまで及んでいるものの，住居跡の南西壁側に多く出土する傾向が認められた。

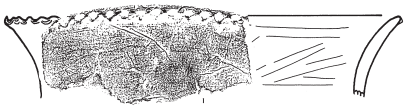
1は西隅周辺の床面上から多くの破片が出土していた。接合する破片は覆土上層まで幅広く出土する。**2**も同様に西隅の床直上及び中層から出土する。**3**も西隅の床直上から上層で出土する。**5**は西隅の床直上から上層で出土しているが，壁際からの流れ込みとみられる。**9**は西隅の下層から出土していた。**25**は西隅側の床直上から出土する。**6**は南隅から中央にかけて床直上から下層で出土する。**15**，**18**，**21**，**27**，**29**，**34**は南隅の一帯の下層から出土した。それ以外はほとんどが覆土中層及び上層からの出土であった。**11**の石鏃は住居跡中央の中層から出土する。**14**の鉄片は南東壁際の中層から出土していた。

出土した弥生土器の内訳は，無文の破片が146点あり，部位別には口縁2点，胴部片137点，底部7点，その内，底面に木葉痕のあるものが1点あった。縄文の施文は単節が11点あり，いくつかは羽状縄文を構成する。附加条縄文は56点であった。この内の底部片には底部穿孔が1点（第13図6）ある。口縁に刻み目のみられるものが8点，輪積み痕などに原体の圧痕4点，結節は6点あるが，原体の圧痕と重複する。多段の輪積み痕の破片は3点あるが14図18に接合した。13図1は櫛描文のみられる唯一の個体であった。



1. 弥生土器　壺（0201）
口径　―　底径　―　器高〈17.3〉
胴部最大径（18.3）
口縁部は欠損，頸部には9条1単位の櫛描文を描き，その上位に6～7条1単位の櫛描により波状文を描く　胴部は附加条（LR+R･R）を全面に施文　底部欠損
焼成）良好　胎土）石英その他の小砂粒多い
色調）外：橙5YR6/6　内：橙2.5YR6/8

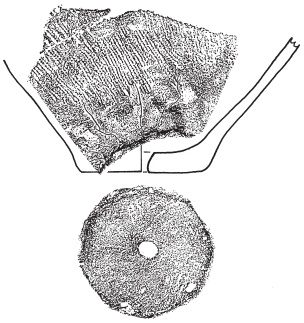
2. 弥生土器　甕（0202）
口径　―　底径　―　器高〈10.3〉
胴部最大径（16.6）
口縁は欠損しているが，無文の頸部の上端にわずかに附加条（LR+R･R）の施文が見える　頸部は横位のナデの無文帯を残す　胴部も附加条（LR+R･R）を丁寧に施文
底部欠損
焼成）良好，胎土）白色砂粒，石英小砂粒
色調）外：赤橙10R6/6　内：にぶい橙5YR6/4



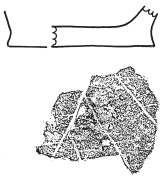
3. 弥生土器　甕　口縁（0205）
口径（20.4）　底径―　器高〈4.3〉　胴部最大径　―
口縁部無文　口縁端部に指頭による刻み　ヘラナデによる整形　口縁内側に煤付着
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）外：にぶい黄橙10YR6/3
内：灰黄褐10YR4/2

4. 弥生土器　壺　胴部（0203）
口径　―　底径　―　器高〈3.5〉　最大径　―
胴部上位に沈線が巡り，上半に羽状縄文を施文
器面全体が摩滅しわかりにくいが，沈線以下に赤彩がわずかに見られる
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：橙7.5YR7/6　内：橙7.5YR6/6

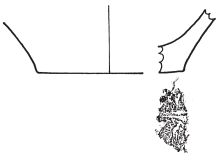
5. 弥生土器　甕　胴下半（0206）
口径　―　底径（5.0）　器高〈11.4〉　胴最大径（18.2）
ハケ状工具により整形，工具によりナデ
内面もほぼ同様で，ハケ整形後ナデ
底面はわずかに残存するが，木葉痕は確認できない
外面の胴中位と底部内面に煤付着
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）外：にぶい橙7.5YR7/4
内：にぶい橙7.5YR6/3



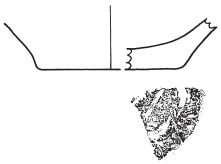
6. 弥生土器　甕　底部（0204）
口径　―　底径6.8　器高〈7.1〉　最大径　―
胴下半が残存，附加条（RL+L･L）を雑に施文
底面に焼成後上下両面から穿孔，孔径5mm
焼成）良好，胎土）白色細砂粒等多い
色調）外：橙5YR6/6　内：にぶい橙5YR6/4



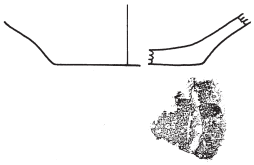
7. 弥生土器　甕　底部（0231）
口径　―　底径（7.8）　器高〈2.2〉
胴最大径　―
底面に木葉痕，内面に煤付着
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：橙5YR6/6　内：黒褐5YR2/1



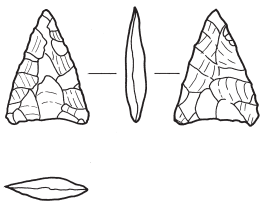
8. 弥生土器　甕　底部（0232）
口径　―　底径（8.0）　器高〈3.3〉
胴最大径　―
底面に木葉痕
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：橙2.5YR6/6
内：赤黒2.5YR1.7/1



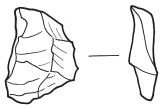
9. 弥生土器　甕　底部（0233）
口径　―　底径（8.0）　器高〈2.7〉
胴最大径　―
底面に木葉痕
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：明赤褐2.5YR5/6
内：赤黒2.5YR1.7/1



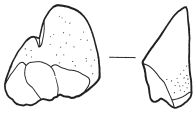
10. 弥生土器　甕　底部（0234）
口径　―　底径（8.0）　器高〈2.8〉
胴最大径　―
底面を平坦に整形
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：にぶい橙7.5YR6/4
内：黒7.5YR1.7/1



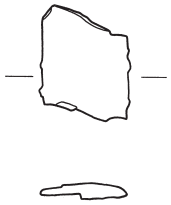
11. 石鏃（0207）
チャート　長さ2.3cm　幅1.7cm
厚さ0.4cm　重量1.1 g



12. 剥片（0209）
石英　長さ1.4cm　幅1.5cm
厚さ0.5cm　重量1.1 g



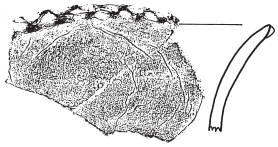
13. 軽石（0235）
長さ2.0cm　幅1.9cm　厚さ0.9cm
重量1.1 g



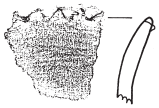
14. 鉄片（0208）
細長い鉄片の破片，種別不明
長さ〈2.3cm〉　幅1.7cm　厚さ0.3cm
重量2.0 g

第13図　2号住居跡出土遺物（1）

0　10cm　1/4（1～10）　0　3cm　2/3（11～14）



15. 弥生土器　甕　口縁（0210）
口縁端部に指頭で刻み，口縁頸部無文，
内面ハケ整形
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）外：にぶい橙7.5YR6/4
内：にぶい橙7.5YR7/4



16. 弥生土器　甕　口縁（0213）
口縁端部に指頭で刻み，口縁無文
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：黒7.5YR1.7/1
内：にぶい橙7.5YR7/4

17. 弥生土器　甕　口縁（0214）
素口縁，無文
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：にぶい黄橙10YR7/3
内：にぶい橙7.5YR6/4

18. 弥生土器　甕　頸部（0211）
頸部に輪積み痕，8段
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：浅黄橙10YR8/3
内：にぶい黄橙10YR7/2

19. 弥生土器　甕　頸部～胴部（0228）
頸部に不規則な櫛歯か　以下に無文帯があり，
胴部に附加条（RL+L·L）を雑に施文
外面に煤の付着多い
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多い
色調）外：黒10YR1.7/1
内：にぶい黄橙10YR6/4

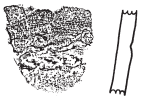
20. 弥生土器　甕　胴部（0212）
胴部中位の輪積み痕に縄文原体の刺突
その上下にS字状結節文を上に2段，
下に1段施文　それ以外無文
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多い
色調）外：黒褐10YR3/1
内：灰黄褐10YR6/2

21. 弥生土器　甕　頸部（0220）
無文の頸部にS字状結節文を2段に施文，頸部下位に
結節文，以下胴部に縄文あるいは附加条
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：にぶい黄橙10YR7/3
内：にぶい黄橙10YR7/4

22. 弥生土器　甕　頸部（0215）
輪積み部に縄文原体の圧痕，無文
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多い
色調）外：浅黄橙10YR8/3
内：にぶい褐7.5YR6/3

23. 弥生土器　甕　胴部（0230）
縄文原体の圧痕，S字状結節文と縄文
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多い
色調）外：黒5YR1.7/1　内：灰褐5YR4/1

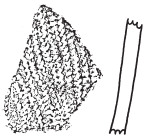
24. 弥生土器　甕　胴部（0217）
結節文と附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：黒褐7.5YR3/1　内：にぶい褐7.5YR5/3



25. 弥生土器　甕　胴部（0216）
胴部中位の輪積み痕に縄文原体の刺突
その上下にS字状結節文を施文
それ以外無文
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多い
色調）外：黒褐10YR3/1　内：灰黄褐10YR6/2

26. 弥生土器　甕　頸部（0222）
頸部下位に結節文と附加条
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：にぶい黄橙10YR7/2　内：黒10YR3/1

27. 弥生土器　甕　胴部（0219）
RL・LRの羽状縄文，下端に円形竹管の刺突
内側赤彩，外面にも一部赤彩か
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：浅黄橙10YR8/4　内：赤10R4/8



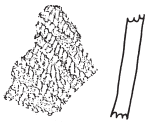
28. 弥生土器　甕　胴部（0218）
附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：にぶい橙7.5YR7/3　内：黒7.5YR1.7/1

29. 弥生土器　甕　胴部（0226）
附加条　外面煤付着
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：黒褐7.5YR3/1　内：にぶい褐7.5YR6/3

30. 弥生土器　甕　胴部（0229）
附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：黒7.5YR1.7/1
内：にぶい褐7.5YR5/4

31. 弥生土器　甕　胴部（0227）
附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：赤黒2.5YR1.7/1　内：赤褐2.5YR4/6

32. 弥生土器　甕　胴部（0223）
附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：灰黄褐10YR5/2　内：黒褐10YR3/1



33. 弥生土器　甕　胴部（0224）
附加条（RL+L·L）
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：にぶい黄橙10YR6/3　内：黒10YR2/1

34. 弥生土器　甕　胴部（0225）
附加条（RL+L·L）か　輪積み痕が残る
焼成）良好，胎土）細砂粒少
色調）外：にぶい黄褐10YR5/3
内：にぶい黄橙10YR7/4

0　6cm
1/3

第14図　2号住居跡出土遺物（2）

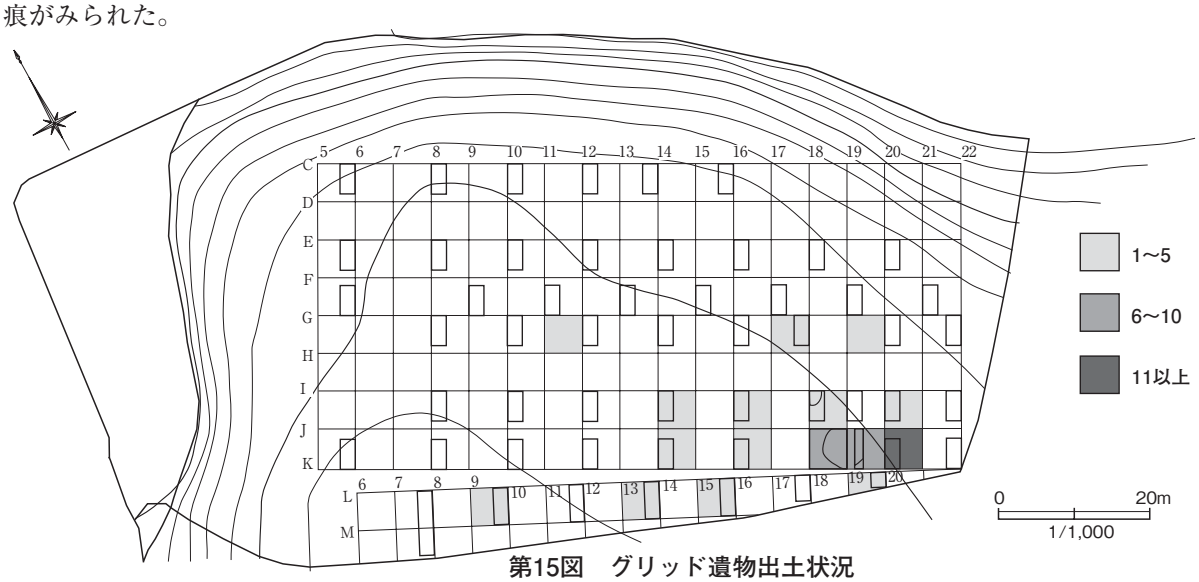
第２節　グリッド出土遺物

確認調査の段階で出土した遺物は132点と全体に出土量は少なく，ほとんどすべてが，弥生時代後期のものであった。出土遺物の内訳は，縄文土器1点，弥生土器が87点，石23点，内1点は砥石，陶器1点，鉄片5点（近現代のものと推定される），近現代の植木鉢やカワラ片など15点であった。

縄文土器とみられるものは1点ある。縄文を地文にして，半裁竹管による並行沈線文で幾何学的な模様を構成している。

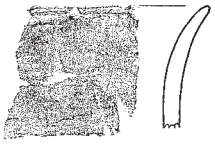
弥生土器の出土傾向は，検出された2軒の住居跡周辺で高い密度で出土する。最も多く出土するJ20グリッドが検出住居跡から若干ずれている。このグリッドは調査区域の際にあり，調査区域外に遺構の展開の可能性もあるのだろう。しかし，この区域以外のグリッドからはほとんど遺物が出土していない。

弥生土器の内71点は無文であったが，縄文が施文されている破片では単節が3点，附加条が6点確認できた。その他，結節が2点，口縁に刻みがあるもの1点，胴部輪積み上に刻み1点，底部の2点には底面に木葉痕がみられた。



第15図　グリッド遺物出土状況

1. 縄文土器　甕　胴部（001）　L11グリッド
地文に縄文，平行沈線を幾何学的模様に構成
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：橙5YR6/6　内：黒褐5YR3/1



2. 弥生土器　甕　口縁（005）　J20グリッド
素口縁，無文
焼成）良，胎土）細砂粒やや多
色調）外：褐灰5YR5/1　内：褐灰5YR4/1

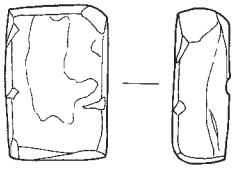
3. 弥生土器　甕　胴部（006）　J20グリッド
結節文2段
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：にぶい赤褐5YR5/3　内：褐灰5YR4/1

4. 弥生土器　甕　胴部（003）　J14グリッド
S字状結節文3段
焼成）良好，胎土）細砂粒やや多
色調）外：黒褐5YR3/1　内：にぶい橙5YR6/4

5. 弥生土器　甕　胴部（002）　表採
附加条か
焼成）良好，胎土）石英・白色小砂粒
色調）外：褐灰7.5YR5/2　内：橙5YR6/6

6. 弥生土器　甕　頸部（008）　J20グリッド
附加条RL+L·Lに末端に結節
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）外：灰黄褐10YR4/2　内：にぶい黄褐10YR4/3

7. 弥生土器　甕　胴部（009）　J20グリッド
附加条RL+2R
焼成）良好，胎土）細砂粒
色調）外：にぶい橙7.5YR7/3　内：明褐7.5YR5/6



8. 砥石(007)　L11グリッド
長さ4.1cm　幅2.7cm　厚さ1.5cm
重量19.9ｇ

0　6cm　1/3（1～7）　0　5cm　1/2（8）

第16図　グリッド出土遺物

第Ⅲ章　まとめ

調査の成果

上ノ山遺跡ａ地点における発掘調査の結果，台地先端部の約6,600㎡の区域に弥生時代後期の竪穴住居跡が2軒検出されたが，その他の遺構は全く検出されていない。また，調査区全体から出土した遺物は，近現代のものが若干含まれるものの，ほとんど他の時代の遺物を含まず，弥生時代後期の遺物が住居跡周辺にまとまって出土していた。

住居跡から出土した弥生土器の傾向としては，縄文が施文されている土器のうち附加条縄文が主体を占め，1号住居跡では単節は全く確認されていない。また，2号住居跡でも羽状縄文を構成する4・27などわずかな量でしかなかった。輪積み痕を残す土器も少ないが，輪積み痕上に縄文原体の圧痕を付すものがほとんどであり，そのまま多段に残すものは2住18だけであった。さらに，明らかな櫛描文は2住1の1個体分が出土するのみである。

その他には，口縁に指頭により刻みをつけるものが多く，胴部の輪積み痕上に原体の圧痕を付し，その上下にＳ字状結節文を区画的に施文するものが目立つ。底部に木葉痕を残すものは意外に少ない。また，底部に穿孔する土器片がそれぞれの住居跡から1点づつ(1住3・2住6)出土していた。

全体的な傾向としては，附加条縄文が主体を占めているように，東関東的な色彩を色濃く残し，羽状縄文や輪積み痕などの南関東的な要素がわずかに生じてきているようにみえる。また，2住1の櫛描文の土器がわずか1個体であるが出土しているところから，住居跡の時期を弥生時代の後期前葉から中葉に位置付けられるのではないだろうか。この2住1の櫛描文の存在を「後期前葉段階に位置づけられる資料で、非常に茨城県南部地域の影響が強い土器である」(注1)という指摘もあり，この1個体分の土器の存在を出土土器全体でどのように評価するか，問題も残る。印旛沼周辺における後期弥生土器の変遷について，さらなる究明が必要である。

現時点では，今回の調査により検出された2軒の住居跡は弥生時代後期前葉から中葉のほぼ同一の時期に営まれた，小規模な集落の一端であるとする。

上ノ山遺跡の全体の概要

上ノ山遺跡の調査は昭和62年のａ地点の調査が最初の発掘調査であり，その後，隣接する平成6年のｂ地点，平成9年のｃ地点で調査が行われた。本跡で行われたこの3地点の調査で，検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡が5軒，近世以降と推定される溝状遺構が2条であった。グリッド出土遺物も縄文時代前期浮島期及び中期と想定される遺物がわずかに出土するが，遺構は全くみられない。また，土師器や須恵器も出土し，古墳時代前期・後期・平安時代に位置付けられるが，量的にはきわめて少ない。

近年，開発が周辺の台地上に及んでいるものの，遺跡の広がりは確認されていない。現状ではこの3地点を大きく広がらない範囲が本跡の限界と考えられるだろう。

ｂ・ｃ地点で検出された3軒の住居跡は弥生時代後期後葉との報告がされており，本跡内でも時間差をもって営まれた極めて小規模な集落であったようだ。

上ノ山遺跡と川崎山遺跡

本跡の北側には小さな谷津を隔てて，川崎山遺跡が所在しいている。川崎山遺跡は広範囲な舌状台地全体を遺跡範囲とするが，昭和54年のａ地点の調査以来，14地点の調査が実施されている比較的全体像のよ

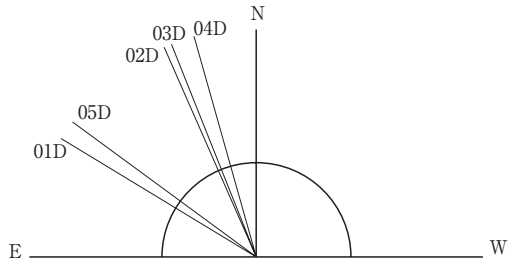
くわかる遺跡である。この遺跡で検出された遺構でも弥生時代後期の所産とされる住居跡が26軒確認されている。平面的にみると台地縁辺に小さな単位の集落が複数集まって川崎山遺跡を形成している。時間軸の精査と共に隣接する集落との関係を明らかにしていく良好な資料群である。

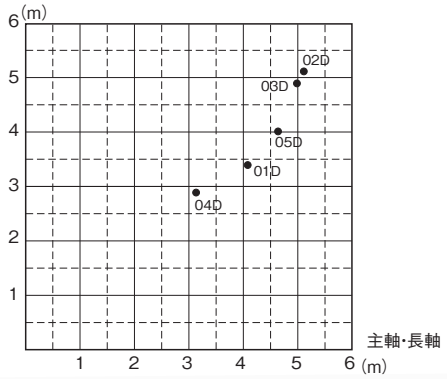
（注1）　深谷　昇　「第3章　まとめ」『上ノ山遺跡b･c地点発掘調査報告書』2000　八千代市遺跡調査会他

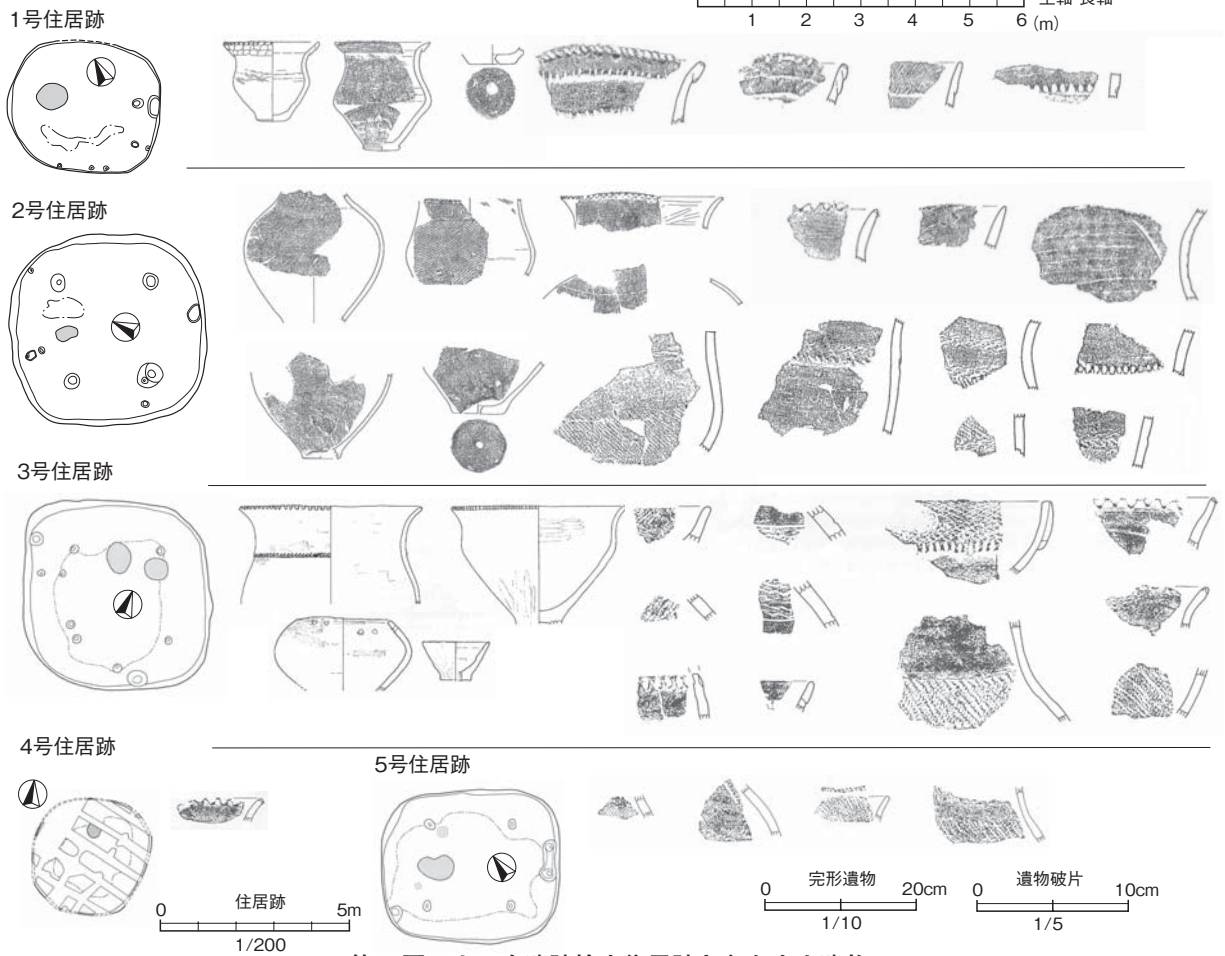
第5表　上の山遺跡　検出遺構一覧表　※ 同一基準で比較するため報告書より再測定している。（　）は推定復元測定値　〔　〕現存又は計測可能値

名称	略称	種別	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	炉	時代・時期	備考
			長軸・主軸	短軸	深さ					
1号住居跡	01D	竪穴住居跡	4.04	3.45	0.5	楕円形	N- 59°-E	炉	弥生時代・後期	主柱穴なし
2号住居跡	02D	竪穴住居跡	5.13	5.04	0.78	楕円形	N- 24°-E	炉	弥生時代・後期	主柱穴4・出入口ピット1
3号住居跡	03D	竪穴住居跡	5.0	4.9	0.55	隅円方形	N- 22°-E	炉2	弥生時代・後期	主柱穴4・出入口ピット1
4号住居跡	04D	竪穴住居跡	(3.15)	(2.95)	0.15	楕円形	N- 16°-E	炉	弥生時代・後期	主柱穴なし
5号住居跡	05D	竪穴住居跡	4.65	4.0	0.6	隅円方形	N- 54°-E	炉	弥生時代・後期	主柱穴4・出入口ピット1
1号溝	01M	溝状遺構	長　28.25	幅　1.1	0.3	—	—	—	近世以降	断面　逆台形
2号溝	02M	溝状遺構	長　7.90	幅　1.0	0.25	—	—	—	近世以降	断面　逆台形

第6表　上の山遺跡検出住居跡の主軸方位及び規模比較





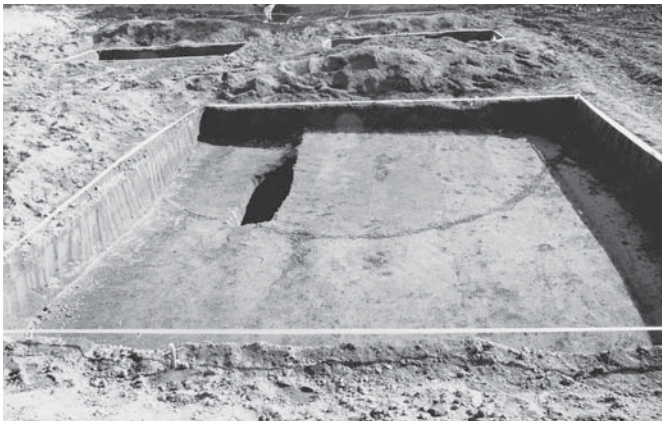


第17図　上ノ山遺跡検出住居跡と主な出土遺物

第18図　上ノ山遺跡と川崎山遺跡の弥生時代後期の住居跡検出状況

1. 確認調査状況

2. 確認調査トレンチ掘削状況



3. 確認調査住居跡検出状況

4. 本調査作業状況 (1)

5. 本調査作業状況 (2)

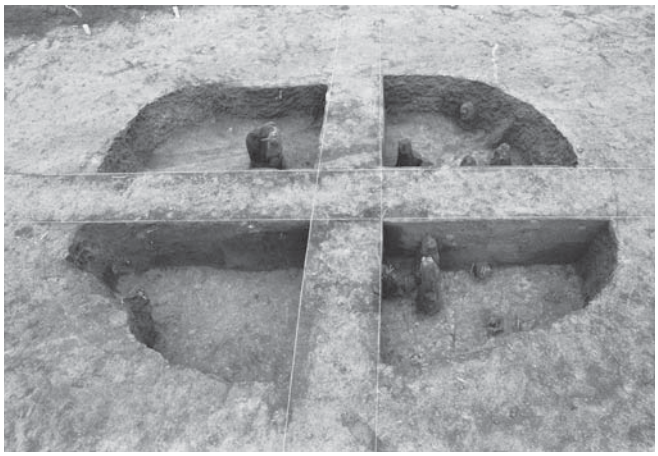
6. 本調査作業状況 (3)

7. 本調査作業状況 (4)

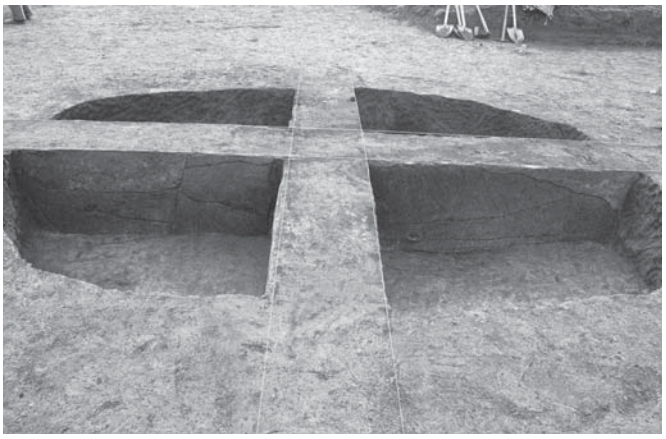
8. 調査完了状況

図版2

1. 1号住居跡



2. 1号住居跡遺物出土状況



3. 土層

1号住居跡出土遺物

3

4

5

6

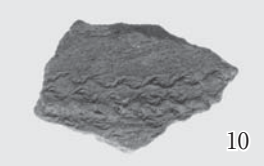
1

2

7

8

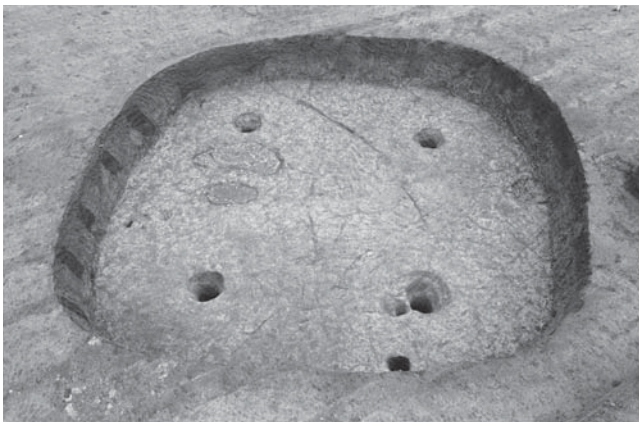
9



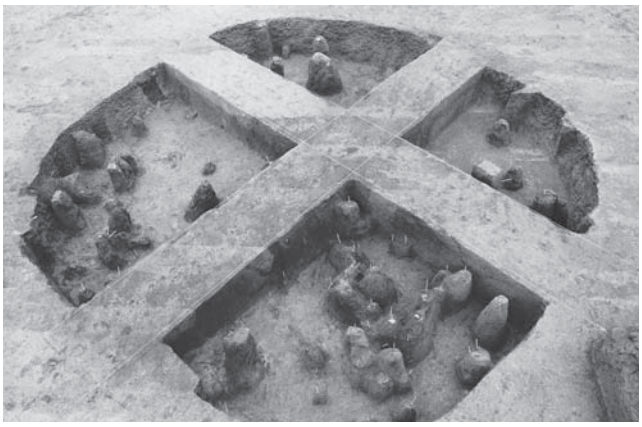
10

11

12



1. 2号住居跡

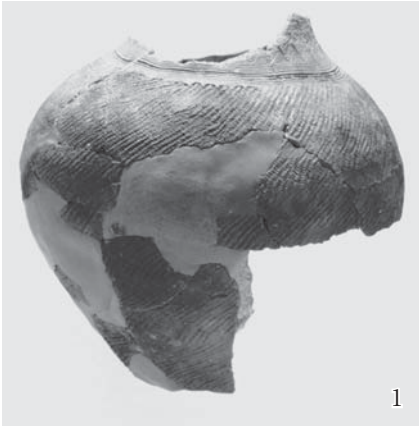


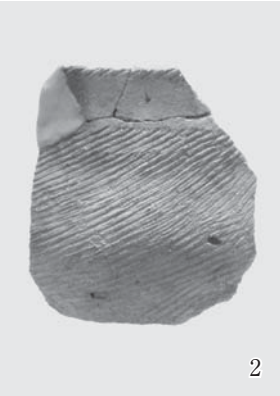
2. 2号住居跡遺物出土状況

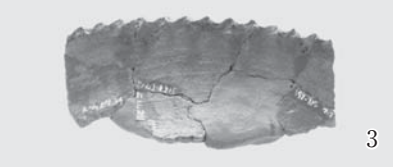
3. 土層

4. 炉検出状況

2号住居跡出土遺物(1)

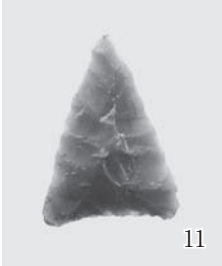






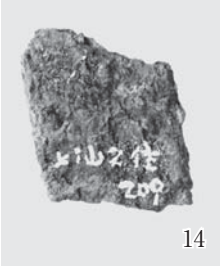
図版４

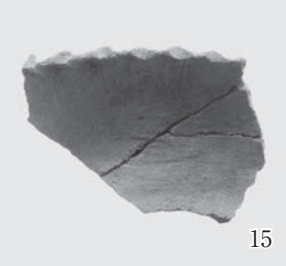
2号住居跡出土遺物(2)

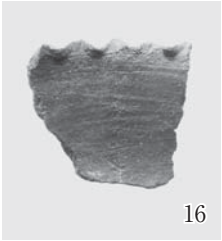

11

12

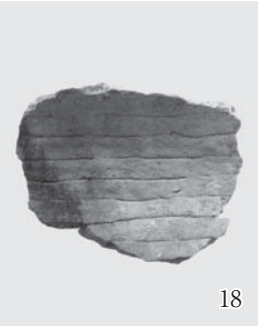
13

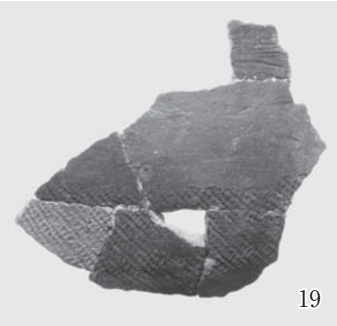

14


15

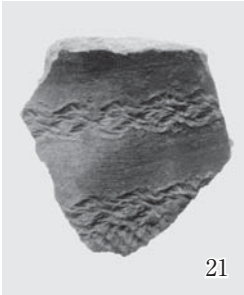

16

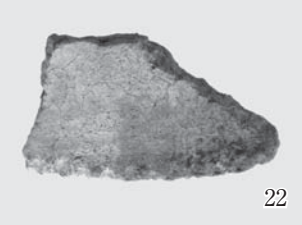
17


18

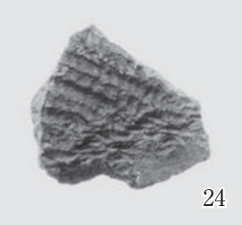

19

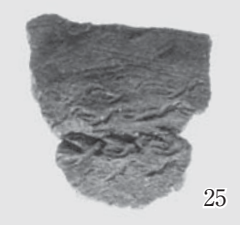
20

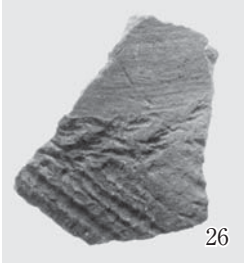

21


22

23

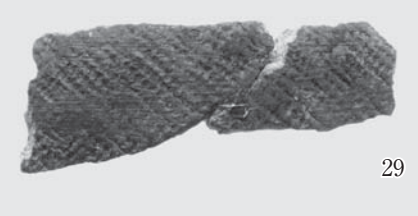

24

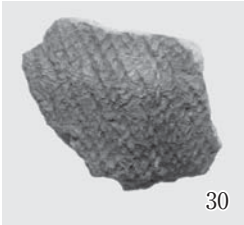

25

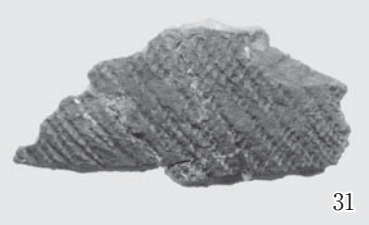

26

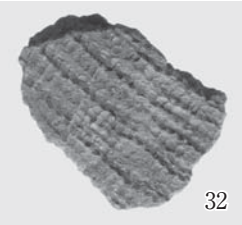
27

28

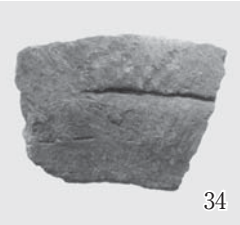

29


30


31

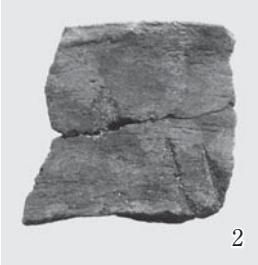

32

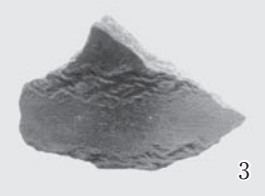
33


34

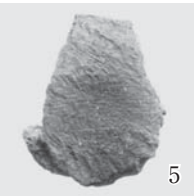
グリッド出土遺物

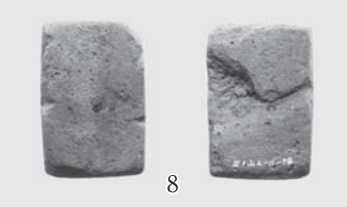
1


2


3

4


5


8

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　うえのやまいせき
書名	千葉県八千代市　上ノ山遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　Tel 047-483-1151 内6114
発行年月日	西暦2008年（平成20年）3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ山遺跡（うえのやま）	八千代市萱田町字上ノ山927-2ほか（やちよしかやだまち／うえのやま）	12221	243	35度 43分 02秒	140度 06分 48秒	確認調査 19861204 ～ 19861213 追加確認調査 19870306 ～ 19870312 本調査 19870306 ～ 19870320	確認調査 466 ㎡/3,700 ㎡ 工事面積 6,577.90 ㎡ 追加確認調査 60 ㎡/500 ㎡ 工事面積 572.4 ㎡ 本調査 170 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ山遺跡（うえのやま）	集落跡	弥生時代　後期	弥生時代 後期　竪穴住居跡　2軒	弥生土器　後期 石鏃 砥石	

要　　約	上ノ山遺跡は印旛沼水系の新川西岸に位置している。新川中流域の沖塚低地に突き出た舌状台地の中ほど，標高22mほどの下総下位面の台地上に営まれた弥生時代後期の集落のａ地点である。区域内からは弥生時代後期の2軒の竪穴住居跡が検出された。

千葉県八千代市

上　ノ　山　遺　跡

― 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 ―

平成20年3月31日発行

編　　集　　八千代市遺跡調査会
八千代市教育委員会 社会教育課内
千葉県八千代市大和田138-2

発　　行　　三奈建興株式会社

印　　刷　　金子印刷企画印刷
千葉県八千代市萱田410-1